

あともう一步で

高野 吾朗

大西が流々^{ルル}と最後に出会ったのは、彼女の訃報を聞いた数週間「後」のことである。

冗談のように聞こえるかもしれないが、あの時の再会の印象は、大西にとつて、そう表現するより他に仕方がないような代物であった。

だが大西は、この再会をさして異常なことだとは考えなかった。昔に比べて、何が現実で何がそうでないのか、区別があまりつかなくなってきたせいかもしれない。何が現実で何がそうでないのか、その違いがさほど重要に思えなくなってきたせいかもしれない。

「もしかすると、眼の前に見えているもの、あるいは見えていたはずのものは、実はただの夢に過ぎず、本当の出来事などではないのかもしれない」

時々、本気でそう思うことすらあった。

彼は今の自分をできるだけ客観的に見つめ直そうとしていた。

つい先日、自分は三十五歳になったばかりのはずである。自分は今、人生二度目のキャンパスライフを東京大学の大学院で送っているはずである。八年間勤め続けたテレビ局を依願退職し、そのまますぐに大学院生となったはずである。外国文学を専攻し、ひたすら小説漬けになろうと努めている途中のはずである。二十代の頃の不勉強を少しでも早く克服しようと、懸命に励んでいるはずである。自分の好みの作品をあれこ

れ翻訳しながら生きていけたなら、なども考えているはずである。ずいぶん昔に、遊び半分で走り読みしたダンテの『神曲』の地獄編を、最初からもう一度読み直そうかとも考えているはずである。別に深い理由があるからではない。ただ単に、作品中のダンテとついに同い年となつてしまったからである。

しかし、本当にこれが真の自分の姿なのだろうか。

たしかにそれらは、どれも事実のごとき顔をしている。

だが実は、全てただの幻なのではないだろうか。

本当の自分は、全く違う姿をしているのではないだろうか。

自分は今、深い眠りのただ中にいるのではないだろうか。

夢を現実と取り違えてしまっているのではないだろうか。

今、私はいったい何者なのだろうか。

今、私は一つの物語を書きはじめているはずである。それは詩のごとき物語のはずである。そんなものを書きはじめるなど、テレビ局で働いていた頃には、全く思いもよらなかつたはずである。しかし、大学時代の自分にとつて、詩を書くことはむしろ何よりの生きがいであつたはずである。一時は本気で、詩人の人生を歩もうと考えていたほどだつたはずである。

物語を書きはじめたのは、三十五歳を迎えたその夜のことだつた。詩にしてはひどく長く、散文にしてはとりとめのなさすぎる作品であつた。この作品を書くために、例の眠り薬を再び常用するようになつていた。あの日、あの喫茶店で、コスモがくれたあの黄色い丸薬である。

流々と出会つていなければ、絶対に書けない物語でもあつたはずである。この風変わりな作品に、私はたしか『あともう一步で』という題をつけたような気がする。

だが、全てはやはり夢なのかもしれない。

いま書いている『あともう一步で』にしろ、このところ毎日飲み続けた眠り薬にしろ、あのコスモという謎の人物にしろ、全ては単なる妄想なのかもしれない。

もしかすると本当の自分はどこかで眠っていて、ここにいるのは単に自分の影法師に過ぎないのかもしれない。

疑い出せばきりがなかった。

真実、だろうが妄想、だろうが、もはや何だつて構わないではないか。

そう強く自分に言い聞かせながら、大西は黙々と、作品を書き進めていった。

『あともう一步で』は、思ったよりも長い話になりそうだった。そこまで本格的に創作するのは、生まれて初めて体験だった。それはどうやら大西にとって、これまでの人生の全てを賭けた行為となりそうであった。わけもなく、大西はそう信じていた。

ただし、話の結末のつけ方については、彼自身、いまだにはかりかねていた。

すばらしい結末を求めて、大西は寝ても覚めてもたえずあえいでいたのである。

死んだはずの流々が再び彼の前に姿を現したのは、ちょうどそんな時であった。

少なくとも、大西にはそう思えたのである。

(単なる思い違いだったかもしれないけれど)

二人が再会したのは、東京大学のキャンパス内にある、とある図書館の片隅であった。

(そう妄想しただけに過ぎないのかもしれないけれど)

その日も大西は、未完の作品『あともう一步で』をかばんにしまい込んだまま、夢とうつつの間をまるでさまようように、独りぼつぼつ歩いていったのだ。

コスモがくれた眠り薬の小瓶も、いつもの通り、かばんの中だった。

テレビ番組制作の仕事をしていた頃、大西は都内の新築マンションにたった一人で住んでいた。かなり高額の賃貸料だったが、放送局がその全額を肩代わりしてくれていた。彼はその措置を至極当然のこととみなしていた。バブル時代に青春を過ごした彼にとって、そう考えるのはいとまたやすいことだったのである。

今でも大西は、入社式で聞いた放送局長の一連の言葉をよく覚えていた。

「君たちはみな、厳しさを知らぬという意味で、戦後史上もつとも哀れな世代だ」

「君たちは、自分の力でゼロから何かを創り出すことができない世代なんだ」

「なぜなら君たちは、ゼロという状態を全く知らずに育ってしまった世代だからだ」

「前の世代が汗水流して築いた世界から、もらえるだけの恩恵を全てもらっているくせに、感謝の念を全く抱かない無礼な世代、それが君たちなのだ」

「そのくせ、君たちほど他人の眼ばかり気にして生きている世代もない」

「目の前で誰かが身を投げようとしているのを見たら、君たちはいったいどうする」

「おそらく君たちの多くは、愚かな同情心とくだらない正義感に誘われて、思わず助けに走ったりするはずだ」

「それこそまさに、我々先人たちが懸命に築いてきた冷徹なジャーナリズムを無視する行為なのだ」

「死に瀕している者を見ても助けるな」

「助けるくらいならカメラを回せ」

「情は捨てろ」

「自分に敵しくなれ」

「人の死に慣れる」

「ゼロの状態に慣れる」

「それができない甘えん坊は、すぐにここから出ていけ」

「おそらく君たちの多くは、ただの敗北者として、いわば弱者として、遅かれ早かれ辞めていかざるをえなくなるだろう」

「その分も計算に入れて余分に採用しているから、我が社としては別に痛くも痒くもない話だ」

局長の檄の一つ一つが、会場を埋め尽くす新入社員の頭上にとどこかと落ちていく。そのたびごとに、壇上に居並ぶ重役たちが、こくりこくりと一斉にうなづく。まことに滑稽な式典であった。

しかし、当時の大西には、局長の言葉がどうにも忘れられなかった。彼の言葉の何かが琴線に触れたのである。

それから一年も経たぬ間に、重役たちは一人残らず、局長の一声で首を切られてしまった。そして局長自身も、しばらくしてからくんだりぬスキャンダルを起こし、やはり見事に首を切られてしまった。大西が会社を辞めたのは、その数年後のことである。

なぜ辞めねばならなかったか。大西自身、正確にはわかっていなかった。いや、「感覚的には十分わかっていたが、それをどう言語化していいものやら、ひたすら思索に暮れていた」という方が、当時の心情にまだ近いかもしれない。とにかく、不鮮明な退社理由であることだけは間違いない。不況の時代に大会社の恩恵を自らなげうつつわけだから、

友人たちの言葉を借りれば、それは単なる「無謀な行為」だった。一人息子の突然の決断に、故郷の両親はひどくうろたえた。「これからいつたいていどうするつもりだ」と、そろって電話口で声を荒げるほどの取り乱しようであった。

会社の給料に不満など全くなかった。仕事の仕組みもすっかり覚えていたし、人間関係に悩んでいるわけでも決まらなかった。けれども「辞めねばならない」。そう言っている自分が心の中に確かにいた——いやむしろ、「そんな自分の中にいるに違いないと感じている自分が確かにいた」と言う方がより正確かもしれない。

ちよつと待ってくれ。

嘘だ。これはきつと夢だ。

私の人生はこんなものではなかったはずだ。

これはきつと他人の人生だ。

きつと誰かがどこかで、私の人生を勝手に書き換えているんだ。

では一体、わたしの本当の人生とは何だ。

大西は考えた。夢中になって考えた。だが正解は、簡単には見つからなかった。

その間も、彼が夢だと疑ってやまぬ人生は、歩みを全く止めてはくれなかった。

放送局を辞めると同時に、彼は会社借上げのマンションを出た。そして、武蔵小金井の野川公園そばに立つ、小さな古アパートへと移り住んだ。大学院に入学したのは、その翌春のことである。

新生活がもたらす興奮のせいも、その年の春は、桜をじっくり眺めることができなかった。しかし次第に、大西の日常生活は、きわめて単調なものへと変わっていった。大学院の授業に出席する時と、その準備に

追われる時以外は、なじみの喫茶店で小説や詩を読みふけるか、いかにも武蔵野らしい昔ながらの風景を求めて近所を自転車で独りさまようか、部屋にこもって大好きなルネ・マグリットの画集を飽かず眺めるかして過ごした。ただそうしているだけで、時間はあっという間に流れ去っていくのだった。他にすべきことなど何もなかったし、あえて何かしてみようとも思わなかった。なげなしの貯金を無駄に使いたくはなかったからである。

誰とも会話しない日々が、幾日も幾日も続いたりした。そんな時、きまっては、眼を開けながら眠っているかのような心持ちに誘われるのだった。

眠り葉がそれに拍車をかけた。いや、眠り葉を再び飲みはじめたからこそ、そう感じはじめるようになっただけなのかもしれない。どっちが先だったか、もはや見当もつかない。

とにかくそれは、まるで冬眠でもしているかのような、あるいは、まるで見えない人間にでもなってしまったかのような、あるいは、水底の岩に挟まって動けなくなつた山椒魚にでもなつてしまったかのような、あるいは、眼だけ除いて体の全筋肉が完全に麻痺してしまつたかのような、何とも説明のつけがたい心持ちだったのである。

頭上にはいつの間にか、うだるような暑い夏空が見渡す限り広がつていた。野川公園の緑という緑から、蟬たちの悲壮極まりない鳴き声が聞こえはじめた。その声は、大西の狭苦しい部屋にまで、洪水のごとく注ぎ込んでくるのだった。

流々の死を知つたのは、そんな夏のある真夜中だった。

どうやら、転落死だったらしい。

おまけに、生まれて間もない自分の子まで、道連れにしてしまつたらしかった。

ちよつと待つてくれ。

嘘だ。これはきつと夢だ。

私の人生はこんなものではなかつたはずだ。

これはきつと他人の人生だ。

きつと誰かがどこかで、私の人生を勝手に書き換えているんだ。

では一体、わたしの本当の人生とは何だ。

「どこから落ちて亡くなつたのか、自殺だったのか他殺だったのか、その辺のことまでは私もよく把握しておりません。唯一わかつておりますのは、お子さんの父親らしき人がどこかへ行方をくらましたままになつている、という事実のみでございます」

コスモからの返信メールは、この一文を最後に終わつていた。

そのメールを読み返ししながら、大西はコスモの顔を再び思い起こしてみようとした。しかし、いくら頑張つても、もはや思い出せはしなかつた。残っているのは、男か女かわからないような人だった、という印象だけである。本名さえ、ついに聞かずじまいだった。相変わらずあの寺で、毎月「ベンガル菩提樹の会」を主催しているらしい。

「久しぶりにメールを頂き、どうもありがとうございます」

コスモからのメールは、決まりきつた挨拶言葉が始まつていた。

「当会に参加して頂いてから、すでに一年の月日が流れておりますが、あなたのことは今でもよく覚えております。あなたと同じくRさんも、あの時が最初で最後のご参加でいらつしやいました。もう彼女は戻つてはきませんが、いまだにいろんな女性たちが毎月参加して下さつています。Oさん、どうかまた遊びにいらして下さい。Rさんのような魅力的な女性ができつと見つかるとは思はずですから。私は今でもあなたのことを、魅力的な男性だと思つておりますから」

自分がある場で「Oさん」と呼ばれていたことを、大西は久しぶりに

思い出した。

遊び半分の気持ちで一度だけ顔を出した、いかがわしき漂うあの集団。それが「ベンガル菩提樹の会」であった。

今からおよそ一年前。むせかえるような夏のことである。

そこで彼は、「Rさん」と呼ばれる見知らぬ女と、いきなり肌を重ねたのだった。「Rさん」、すなわち流々のことである。

なぜコスモに、再びメールを出すことにしたのだろうか。

なぜ突然、「あの時のRという女性は今どうしていますか」と書いてみたくなったのか。

なぜ急に、流々のことをこんなにも強く思い出さねばならなくなったのか。

大西は我ながら、全くはかりかねていた。

はかりかねていたからこそ、彼の心はなおいつそう、流々との思い出へと激しく引きつけられていったのである。

コスモからの返信を何度も読み返してみる。流々の記憶が、また少しずつ舞い戻ってくる。出会いから別れまで、たった二週間という短い記憶ではあったが、思い出そうとするだけで、彼の体はなぜかあの頃のように熱くなっていった。

何よりもまず最初に思い出されたのは、彼女のあの舌であった。もやのごとき記憶をたくり寄せ、あの肉厚の唇のさらに奥を心の眼で再びのぞき込むと、すっかりえぐり取られた舌の痕跡が、再びじわじわとよみがえってくるかのようにであった。舌のない女と交わるのは、きつとあれが最初で最後となるだろう。

次に思い浮かんできたのは、彼女が詩人であり、なおかつ文芸翻訳家

であったという事実である。とはいえ、あれで本当に生計が成り立っていたのか、いま考えると大西にはかなり怪しく思われた。なぜあの頃、それが怪しく思えなかったのか。考えてみれば不思議なことだった。

ああ、もつと思い出したい。もつと。もつと。

過ぎ去った一年という月日を思い切り飛び越えて、あの頃へ、あの場所へ、もう一度きちんと遡ってみたい。

流々がもうこの世にいないと知ったその翌日から、大西のこの思いはますます強くなりはじめた。なぜそうなるのか、自分でもよくわからぬままに。まるで、小説家の気分次第に、右へ左へ好き勝手に操られていく主人公にもなったかのような気分であった。

そして、その数週間後、彼は再び流々と出会ったのである。

やっぱり嘘だ。これはきつと夢だ。

私の人生はこんなものではなかったはずだ。

これはきつと他人の人生だ。

きつと誰かがどこかで、私の人生を勝手に書き換えているんだ。

しかし眠い。自分は果たして、いま本当に起きているのだろうか。

その日も大西はいつものように、雲一つない空の下を大学院へ向かってゆつくりと歩いていた。

道行く人々の夏服が、いつも以上に虚ろに映る。

どこもかしこも蝉の声である。これでもか、これでもかとはかりに鳴いている。このまま死んでも構わない、といった鳴き方である。真冬の地上を覆い尽くす白雪のように、全世界を一つに包み込もうとしてやまない、究極の声音である。もちろん、今の大西の耳には、ただのやかましい騒音くらいにしか聞こえてこない。

丸の内線の本郷三丁目駅から東大キャンパスまでの道のりが、いつも以上に長く感じられる。眠い。総合図書館に着き、持参した洋書を手にとって読もうとしてみるが、文章がなかなか頭に入ってこない。ただ眠いばかりである。

葉を飲みすぎたのだろうか。しかし、あの葉なしには、この作品を完成させることなどはや絶対に無理なのだ。『あともう一歩で』。そう、あともう一歩なのだ。

眼の前に、舌を失った流々の口がそこはかとなく浮かび上がってくる。それに続いて、はつきり相手を見据えて離さないあの両眼が、ゆっくりとよみがえってくる。

まるで深海を思わせるような瞳の色だ。

高めの鼻の輪郭も、うっすらと思い出されてくる。

耳たぶの手触りが思い出されると、あの髪の手やまでがほんのりと心をよぎります。

長い首筋が徐々に姿を現すにつれて、二の腕と乳房の感触が久しぶりに心の表面へと戻ってくる。

指の細やかな動きが肌をつたいはじめると、独特の吐息とあの汗の匂いが周りに満ち満ちてくる。

そして最後に、陰部と両腿と足の指先が順々にちらついて、ようやく全体像が何となく一つになった気がしてくる。

だが、流々の体の各部分の記憶は、勝手気ままに点滅するばかりで、なかなか同時にうまく発光してはくれなかった。どの記憶もまるで波のごとく、来たかと思うとすぐに崩れ去っていった。顔つきさえ、うまく一つにはまとまらなかった。そのちぐはぐさが大西を余計じれつたさせた。本など、とても読めたものではなかった。

思わず席を立つと、彼は図書館を出て、キャンパスをうろつきはじめ

た。ただわけもなく、ぼうつとしたからである。ただわけもなく、昔に浸ってみたくなっていたからである。それこそがその日の自分の気分にといいよりも、自分の人生における「今」という時間のありように、最もしっくりする気がしたからである。

三四郎池を二度ほど周り、弓道場横の階段にしばし佇む。時計台の下でコーヒーをちよつと飲み、そのまま生協の本屋まで歩き、そこでしばらく立ち読みをする。雑誌を斜め読みし、しばらくしてから柵へと戻し、暗れ渡る空の下へと再び戻る。

蝉時雨はその間も止むことなく、周囲の木々の中で延々と続いている。刺すようなきつい日差しが、彼の意識を次第に遠くへとさらっていく。このままだともたやすく、昨年初めへと立ち返れそうである。

記憶のどこまでが真実でどこからが妄想なのか、いつものように区別がつかない。区別などつけなくても構わないではないか——誰かが彼の心に、そうささやいてくる。

気づくとそこは、深夜の放送局だった。

制作部の大部屋には、もはや大西しか残っていなかった。何十本もの蛍光灯が、彼のために煌々と照りかえっている。どの机にも、資料の山と取材テープの山が放置されたままになっている。部屋の一方に、巨大な窓がある。十五階という高さから、きらめく東京の冬の夜景が窓を通して見渡せる。疲れ切った顔のまま、彼は自席に座り込んでいる。そして一心不乱に、パソコンのキーを叩いている。ネットサーフィン中に偶然見つけた「ベンガル菩提樹の会」というサイトの主催者に、自己紹介と入会希望のEメールを書いているのである。

自らのサイトの中で、コスモは会のことを次のように説明していた。「当クラブをただの風俗産業のように考えたり、性欲処理のための格好の場とお思いいなってしまう方は、まことに申し訳ありません

が、入会をご遠慮下さいませ」

「我々は毎月、男女入り乱れて肉体的に交わり合っております。しかしそこには、崇高な目的が存在しているのです。互いに交わりあいながら、我々は真の人類愛を共有しようとしているのです。現代人の孤独という病を根本から癒そうとしているのです。互いの痛みを分かりあい、愛を与えあおうとしているのです。自分以外の世界の存在を、肌で感じあおうとしているのです。下らぬ世間体から、利害と打算ばかりの世の中から、互いを解放しあおうとしているのです。乱交クラブなどではあめめません。あえて言うなら『共生』のためのクラブです。『共性』のためのクラブと言ってもよいでしょう。性を通じて汝の敵を愛するようになるこそが、我々の究極の目的なのです。一種の宗教と呼んでも頂いても結構です。会員の方々のご信仰にしましても、まことに色とりどりでございます。世に言う『障害』をお持ちの方ももちろんいらっしゃいますし、そうでない方ももちろんいらっしゃいます」

「月一回の集まりにお越しになる女性たちは、皆さんなまめかしい方々ばかりでございます。世の男性なら一度はこの腕にかき抱いてみたいと思う人ばかりが、毎回集まってこられます。なまめかきさが、女性会員を選ぶ際の唯一の条件でございます。美醜の判定につきましては、全て私にお任せ下さいませ」

「ただし、男性会員に関しましては、このルールの対象外とさせて頂いております。当クラブにおきましては、男性のお顔の美醜は一切問いません。ただし、それは全く異なる基準を独自に設けさせて頂いております。僭越ではございますが、私の眼にかなう男の方だけに入っております」と

「当会の具体的な遊び方につきましては、ここでは詳しく申し上げかねます。面接の際、さらに詳しくお伝えするいたします」

最後の一文のすぐ下に、コスモは半人半魚の女の西洋画を載せていた。海辺に寝そべるその姿は、上半身が魚で、下半身が女の裸であった。魚

の目の中に、彼は深海の底を見たような気がした。懐かしさを誘う眼であった。

マグリッドの絵だ。大西はすぐに理解した。

「お宅のようなクラブに足を向けたことは、これまで一度もありませんが、実は——」と書き出してみて、大西はふと、奇妙な気分が襲われた。

水商売だの、援助交際だの、デートクラブだのといったものとは、たしかにそれまで全く無縁の人生を送ってきたからである。

結婚歴もある。前妻以外との女性経験も、一応それなりにある。だが、乱交については「乱交などしてはおりません」とコスモはきつと抗弁するだろうが、全くもって未知数であった。大河のこちら側とあちら側くらいの距離感があった。

しかし、今の彼の心は「あちら側」に行きたくてたまらなくなっていた。そうしなければ気持ちがざわついて、どうしようもないほどだったのである。

風変わりな風俗を、ちよつと試してみたかったのだ。異常な興奮に、ひととき没頭してみたかったのだ。禁を犯すスリルを、少し味わってみたくなつたに過ぎない。あるいはただ単に、人恋しかつただけのことなのかもしれない。

まあいい。今となつてはもつともらしい理由など、どうでもよいことである。

いつもなら、まず論旨を熟考し、次に結論をしつかり定め、最後に他人の評価を確実に予想してからでなければ、公式文書だろうと個人的な書簡であろうと、一行たりとも書きはじめることのできない男だった。

しかし、この夜の彼はどこか妙に違っていた。一切考えることなく、ただひたすら無心にキーボードを打っていたのである。

単なる自己紹介だったはずのメールは、いつしか歴大な長さとなっていた。故郷の広島のことまで、事細かに書き込んだりしていたからである。平和記念公園や原爆ドームにまつわる思い出など、全く必要のない情報のはずであった。それなのに、なぜかどうしても書かざるをえないのだった。最初から全体を読み直してみると、まるで自らの半生を綴ったかのような内容に仕上がりがりつつあった。

もしかすると、ブライントゥッチで文章をタイプするのは、これが生まれてはじめての経験かもしれない。一体なぜ、急にそんな芸当ができるようになったのか——それは大西本人にさえわからなかった。ただ、そうなるべくしてそうだったのである。彼はひたすら、書くという行為そのものに心底没頭していた。気持ちのおもむくままに、見知らぬ相手に対して、自分の人となりの全てをあらかた開いてみせようとしていたのである。

コスモから返信が届いたのは、翌日の夜だった。

「メールをどうもありがとうございます。今後はあなたのことを、Oさんと呼ばせて頂くこととします。あなたが会員として本場にふさわしい方なのかどうか、まずは一度きちんと面接させて下さい。JRの阿佐ヶ谷駅から線路に沿って西へ数分歩いたところに、『さまよへるユダヤ人』という名の風変わりな名曲喫茶がございます。グリーン・グループというクラシック音楽のピアノリストを、Oさんはご存じでいらつしやいますか。このお店は開店から閉店まで、グループのピアノ演奏ばかり流すんです。私は彼が大好きでして、その意味でもこの店は、私の大のお気に入りなんです。ご足労ですが、今度の土曜日の午後一時頃、そこまでお越し下さいませ。私どもについての詳細は、その場でじっくりお話ししたいと思えます。それと同時に、あなたの人となりも、じっくり拝見させて頂きたいと思えます」

大西はこの返事を、その日の真夜中過ぎに読んだ。明日の朝、返信を書こうと思いつながら、その日はそのまま休んだ。

だが結局、返信することができたのは、それから数ヶ月先だった。

コスモのメールが届いた翌朝、未曾有の大地震が神戸を襲ったからである。

やっぱり嘘だ。これはきつと夢だ。

私の人生はこんなものではなかったはずだ。

これはきつと他人の人生だ。

きつと誰かがどこかで、私の人生を勝手に書き換えているんだ。

ああ、もういい。書き換えたいなら勝手に書き換える。もう何だつて構わない。

神戸の街はすでに壊滅状態らしく、死傷者は数千人に達している模様だった。大西はさつそく、数人の同僚たちとともに現地へ急行するよう命じられた。到着すると同時に、彼は先乗りしていた同局の現地取材班に加わった。取材班の主な使命は、被害の全状況を一大ドキュメンタリー番組に仕立て上げるといって、巨大プロジェクトであった。

メディアにとつて今回の地震は、数十年に一度あるかないかというくらいの大規模なネタであった。当然のごとく、大西たちの番組プロジェクトには、莫大な予算とゴールデンタイムの放送枠が上からぼんと与えられた。といつても、取材開始から放送日まで、そんなに時間が残されているわけではなかった。速報性が大いに求められる番組内容だったからである。大看板番組というだけあって、その放送時は早くから毎日のごとく画面上で派手に告知された。局内の誰もが固唾を飲んで、その出来映えに注目していた。

チームはまず手始めに、カメラクルーなしで被災地を隅から隅まで駆け回ってみることにした。被災者たちから様々な体験談を聞き集める仕事である。カメラ映りのいい被写体とストーリーを探するというのが、その主な目的であった。幾日もの時間とけっこうな費用が、その作業のためだけに費やされた。大西の心は重くなっていくばかりだった。

ああ、この街には二度と来たくない。

たとえこの先、どんなに復興したとしても。

何かなすべし確固たるものが私にあって、それが被災地のどこかで真に求められているものだったとしたら、話はおそらく別だったに違いない。

被災者たちにテレビカメラを向け、「地震のことを話してくれ」と詰める仕事に、いったいどれほどの意義があるというのか。

被災地に入る直前、上司たちが異口同音に唱えていたスローガンがある。

「君たちがこれまで手がけたどんな番組よりも、これまで関わってきたどんなトピックよりも、今回ははるかに記憶に残る仕事となるはずだ」
そう言われてもなお、彼の心は浮き立たなかった。取材拒否の連続で作業が難航することは必至だったし、「俺たち被災者を喰い物にするな」と非難され続けることも十分に予想できたからである。

もしもあの時、この街で暮らしていたなら、おそらく私も家を失い、家族まで失っていたことだろう。

いかに人生を再出発させるべきか、考えあぐねているその最中に、「あの激震時の気持ちを思い出して下さい」と誰かに無神経に問われたら、果たしてどう振る舞うだろう。

考えるまでもない。

腹を立て、そいつを突き飛ばすだろう。

私は本来、そういう人間だったはずだ。

どうして被災者探しなんかに明け暮れているんだ。
どうしてハイエナみたいに街をうろついているんだ。

そんな彼の思いなど、他のスタッフは知る由もなかった。全体ミーティングの席上、大西は上司の一人からこう注文された。

「おまえが担当するのは、社会的に最も『弱者』とされる被災者の避難の困難さを検証するVTRだ。いかにも弱者だな、という雰囲気の間を見つけて出してくるんだ。できれば重度の障害者なんかがいいな。そいつが不幸せであればあるほど、こっちとしてはありがたい。番組自体に社会性がより反映されることになるからな」

「はい、わかりました。全力を尽くします」

「おまえは器用な奴だから、きつとうまくやるだろう。期待してるぞ。といつても、そんな器用貧乏なところが時に玉にキズなんだがな」

このミーティング以来、大西はプロジェクトの他の面々から、「弱者」というあだ名で呼ばれるようになった。

彼がやつのことで見つけただした格好の取材対象、それは神戸市長田区の市営住宅に暮らすある母子家庭だった。母親はすでに六十代後半で、全盲だった。一方、三十代後半の息子は数年前に壊疽にかかり、両足がともに不自由となっていた。彼は地震前日まで、母の世話をするその傍ら、電話で懸命に職探しをしていたという。地震直後、彼らは激しい揺れになす術をなくし、狭いアパートに二人してじつとくままっていた。しばらくすると、ぎしぎし音を立てながら、住宅全体が少しずつ傾きはじめた。隣人たちが我先にとばかり避難する様子が、壁の向こうから聞こえてくる。息子は毛布をひっかけたまま、「おふくろ、俺たちも逃げよう」と言った。しかし母親は、それを頑として拒んだという。

「眼が見えへんのに、避難所なんかに行つたかて、どうせあかんわ。どこにトイレがあるかもわからへんやろし、どこをどう動いたらいいか

もどうせ覚えられへんやろ。他の人の足、踏んだりもするやろし、周りの人にもえらい迷惑かける。ここに残らして。ここで死ぬるんやったら、もう本望や」

制作スタッフの全員がこの親子の逸話で果たして満足してくれるかどうか、正直言って大西はかなり不安であった。プレゼンテーションの前日まで、彼の頭の中は、「これで本当に番組になると思っているのか」「何年この仕事をやってるんだ」と一喝される恐怖でいっぱいになっていた。だが、おそろおそろこのエピソードを伝えるや、みんなこぞって喜んだ。直属の上司も「満悦の様子だった。同僚たちも大西の取材力を手放して賞賛した。」

「この親子をうまく使えば、障害を持った被災者の状況がかなりドラマチックに描けそうだ」

「よくそんな親子を見つけたな、弱者」

「今度の番組に欠かせないのは、そういう『社会的弱者』なんだよ」

「いやあ、本当によくやった」

様々な祝福の言葉が局内を飛び交った。その様子を見て、大西はほっと胸をなでおろした。だがその一方で、彼の心はますます複雑な様相を呈しはじめていた。

この親子に出会うまで、大西は予想以上に苦しんだ。

彼はまず、被災した障害者の世話を専門に行っているボランティア団体全てに電話をかけ、被災者リストを見せてくれないかと交渉した。しかし、どの団体も冷淡だった。「そちらを信じないわけじゃないが、そんな物をテレビ局に公表して、悪用されることでもあったら、ちゃんと責任取ってくれませんか」と逆に言い返されると、彼はそれ以上何も頼めなかった。

次に大西は市役所に行き、街に住む民生委員の名簿を見せてもらうことにした。記載されている各家を一軒一軒訪ねて回り、彼らが世話し

ている障害者の全消息を把握しようとしたのである。

しかし、これはこれでなかなか神経を使う仕事だった。「いきなり何ですか」と言われるのは序の口だった。「同じような取材は何度も受けたい」「もううんざりだ」「見せ物じゃないんだから構わないでくれ」とあちこちで言われ、大西は頭を抱えた。唾をはきかけられもした。バケツで水をかけられもした。冬の水の冷たさが身にしみた。取材意図を丁寧に説明し、悪意のないことを説き、協力してもらいたい旨を必死で伝えたいにもかかわらず、全ては感情論で門前払いされてしまったのである。彼らの態度を責めることなど、もちろんできるはずもなかった。

彼は笑い方をすっかり忘れていた。当の親子を見つけた後でさえ、笑えない日々はなおも続いた。この二人がテレビカメラの前に立つことを了承するかどうか、まだ何の確証もなかったからである。

しかし、とにかく彼らでいくしかないじゃないか。

みんな、そう期待しているんだから。

撮影許可の件で親子に会うその前夜、大西は放送局が用意してくれた取材用仮設キャンプの一角に座り込むと、自前のパソコンにかじりつきはじめた。担当するVTRの荒い「構成表」をあらかじめ書き上げおきたかったからである。カメラマンに撮り方を考えさせ、テープ編集者に編集方針を考えさせるためには、こうした設計図が前もってどうしても必要となる。構成表を書くのは、取材ディレクターの大きな役割の一つだった。番組は全部で二時間。そのうち、彼のVTRの占める時間はおよそ十分間である。メインスタジオでキャスターとゲストたちがやりとりするその合間合間に、様々なVTRが次々と流されていくというのが、番組全体の大まかな流れであった。

徹夜で「構成表」を書き終えて、窓の外へと眼をやると、とても冬と

は思えないほど、安穩とした朝日が満ちていた。街には今日も、被災者があふれているはずである。そしておそらく、山の向こうでは、今日もいつも通りの平和な時間が淡々と流れているはずである。自分は本来、向こう側にいるはずの人間だ。この仕事が終わる次第、すぐさまここを離れて、山の向こう側へと戻っていく人間だ——この事実が、大西にはひどく不条理に思われた。そして、その不条理さが、印刷したばかりの「構成表」にも如実に表れているような気がして、彼は思わずその紙を、びりびりと破り捨ててしまいたくなるのだった。

構 成 表

物語の主な流れ	必要な映像	ナレーションの概要
スタジオでVTRの紹介	キャスターのワンショット	避難所での情報収集ネットワークが少しずつ復活していく陰で、そこから完全に取り残されてしまった人たちもいたのです。今度はそんな一例をご覧ください。
[VTR 第一部] 情報源を絶たれた 障害者たち	<ul style="list-style-type: none"> ● ラジオに触る弱々しい手 ● 暗闇の中にぼつんと置かれたベッド（イメージ映像） ● 愛用のラジオを愛おしそうにでるOさん ● カメラに向かって泣きながら話すOさん 	<ul style="list-style-type: none"> ● 目の不自由な人にとって、ラジオは最も大切な情報源です。地震によってそれが絶たれてしまった時、その不安は例えようもありません。 ● Oさんは全盲です。この街に六十年間暮らし続けてきた彼女は、地震の直前まで寝床でラジオを聞いていました。しかし、揺れと同時にラジオの音はかき消えました。 ● (Oさん)「私の心の支えはラジオです。それがダメになり、情報がわからなくなって不安でした」

<p>[VTR 第二部] 闇の中で過ごした 当日</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 市営住宅の外観 ● 建物の被害の様子 ● 居住禁止の張り紙 ● 部屋の中で暮らすRさん（歩行困難な様子） ● 愛用のラジオとOさん ● 闇の中で物言わぬままのラジオ（イメージ映像） ● 赤い緊急用ボタン ● 錆びついた玄関上の非常ベル ● 部屋の中に佇むOさんの背中 ● 住宅室内のわびしさを強調するカット ● 窓から見える風景・近所の被害状況 ● 泣きながらしゃべるOさん ● 痛い足をさするRさん ● 台所に不安そうに立つOさん 	<ul style="list-style-type: none"> ● 街の一角にある市営住宅。この四階に彼女は暮らしています。地震のために建物は土台から傾き、すでに居住禁止の状態です。しかし、それでもOさんはここから一步も動かずに暮らしています。 ● 彼女は昨年の夏から、ここで長男のRさんと一緒に暮らしてきました。Rさんは二年前の交通事故が元で、両足が不自由です。 ● 母親のOさんは、常に四台のラジオを部屋のあちこちに置いていました。しかし、地震による停電で、ラジオは使いものにならなくなりました。四台とも電気コードを使用して聞いていたのですが、電池の買い置きがなかったのです。Rさんはこうして、最も頼りにしていた情報源を絶たれたのでした。 ● Oさんの寝室には、鳴らすと家の外に伝わる仕組みの緊急用ボタンが設置されていました。しかし、それを使う余裕など、彼女には全くありませんでした。 ● しばらくすると、彼女と親しくしていた一階上の主婦が、家の外から「大丈夫か」と声をかけてくれました。 ● 玄関をふさいでいた家具を息子のRさんがどけてくれたおかげで、Oさんはその女性と何とか話すことができました。 ● 「他の住人は、全員すでに外に出た。近くの中学校に逃げようかとみんなで相談している。一緒に来ないか」。友だちの主婦はOさん親子をそう促しました。 ● 息子のRさんも、部屋の窓から近所の建物の倒壊状況を見て驚き、「どこかに避難しよう」と母親に言いました。 ● しかし、Oさんはその誘いをあえて断りました。（避難所を拒んだ理由を臨場感たっぷりに話してもらおう） ● 足の不自由なRさんにとって、外を歩き回っての情報収集はほとんど困難でした。 ● Oさんは週一回、隣町に住むプロのヘルパーに買い物の世話などを頼んでいました。地震の前日も、彼女はヘルパーに電話をかけて、翌日の
--------------------------------------	---	--

	<ul style="list-style-type: none"> ● 室内の黒電話 ● Rさんのポケットベルがけたたましく鳴る様子 ● 夜の住宅街の外観 ● 二人の部屋の窓だけ灯りがついている様子 ● 母親のそばで話すRさん 	<p>通院看護をお願いしていたのです。かかりつけの病院へ行き、いつもの薬をもらうことにしていたのです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● しかし、交通事情の混乱のせいで、ヘルパーは来ることができませんでした。電話も不通となり、二人は途方に暮れました。 ● 息子のRさんがいつも使用していたポケットベルに、遠方の友人たちから次々とメッセージが入ってきました。しかし、せっかく電話番号を伝えてもらってもかけることができません。Rさんの苛立ちは次第に高まっていきました。 ● 市営住宅に暮らす二十世帯のうち、逃がずに残ったのは二人だけでした。サイレンが鳴り響く真夜中、親子は闇の中にローソクを一本立て、残り物のお菓子を夕食代わりに食べました。外からの情報を全く得られぬまま、二人は不安な一夜を過ごしたのです。 ● (Rさん)「消防のサイレンが絶えずして、生きた心地がしなかった」
<p>[VTR 第三部] 翌日以降、情報は増えたが…</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 階段をゆっくり降りるRさん ● 地震当日と同じ道を歩くRさんの寂しげな後ろ姿 ● ラジオを虚ろに聞くOさん ● 学校の校庭を覗くRさん ● 校内をうろつき、当時を回想するRさん 	<ul style="list-style-type: none"> ● 安心して行ける避難場所さえわからぬまま、Rさんは意を決して買い物に出かけることにしました。開いている店の見当がつかないので、買い物袋を持つ人に会おうと、情報を尋ねて回りました。 ● Rさんは帰宅すると、スーパーマーケットに行く途中で見た周囲の状況を母親に話して聞かせました。しかし、記憶の中の街並みがいかに激変したのか、Oさんにはなかなか想像が付きませんでした。 ● 息子が買ってきた電池のおかげで、Oさんは愛用のラジオを再び聞けるようになりました。しかし、避難所への移動を促すような情報は何一つ聞けませんでした。 ● 数日後、Rさんは足を引かずりながら、近所の中学校の体育館を訪ねました。そこにも多くの住人たちが避難していました。 ● しかし、混乱を極める体育館の様子を見た途端、Rさんは即座に判断しました。「ここでは自分も母親も暮らせない」。こうしてRさんは、誰にも声をかけることなく帰宅したのです。

(VTR終了)	● カメラに向かって嘆く くおさん	● (Oさん)「眼の不自由な人の多くが避難所に行けていないはず。私のような弱者にとって、真に必要な情報とは……」
---------	----------------------	--

今回もまた、常套句だらけになってしまった。

こんな表ごときで、他人の人生を語ったつもりになるなんて。こんな話の結び方で、本当にいいのか。

大西の担当部分のロケは、予定通りその翌日から始まった。息子のRは取材を快諾してくれた。おかげで彼のインタビュは、まことにスムーズに終了した。親子二人の姿もあれこれと撮影した。当時を再現するようなイメージカットもたくさん撮れた。どうやらVTRは、構成表の通りに収まってくれそうな雲行きだった。こうしてとうとう、残すは母親のインタビュだけとなった。

だが彼女は、「話すのだけはどうか勘弁してほしい」と強い口調で言い切ると、白く濁った眼を虚空に向けたまま、首を横に振り続けた。相当の時間を費やしたあげく、大西はやつとの思いで彼女の拒絶の理由を聞き出した。

「眼の不自由なこの顔を、テレビを通して他人様に見られるやなんて」

彼女はぼそぼそと小声で話した。蚊の鳴くような声であった。

「地震の後にね、血圧がえらい上がるようになってしまった。おかげで、つらうてつらうて。思い返すだけで、なんかこう、えらい興奮しますねん。血圧が乱れますねん。カメラの前で話すやなんて、もつての他ですわあ」

大西の顔面は蒼白になった。母親の話をきちんと映せないとすると、彼の担当パートは画竜点睛を欠くことになってしまう。残された時間を考えると、彼らに代わる人物を新たに見つけることは、ほとんど至難の業である。

こんな四面楚歌の仕事に、なぜ私はまだ固執しているのか。

何やら厭世的な気分が襲われて、彼の精神状況はますます始末に負

えないものとなつていった。

母親を説得するために、再びかなりの時間を費やさなければならなくなつた。傾いた文化住宅の階段を上り下りする日々が幾日も続いた。「何とかカメラを持ち込ませてほしい」と、親子の前で土下座までした。母親には全く見えていなかつたろうが、この際、もはやお構いなしだつた。

ようやく、母親は撮影を許してくれた。およそ二時間弱の間、大西はカメラの横に陣取ると、目の前にべたんと座り込む老女にあれこれ質問を浴びせかけた。地震の記憶をありのままに語らせること、それこそがこのインタビュの最大の目的であつた。「私ほどあなたに同情している者はいない」という態度を懸命に装いつつ、彼は老婆に相対した。話しながら母親は、極度の興奮のあまり、何度も何度もカメラの前で泣き崩れた。その顔は、いつ貧血を起こしても不思議でなくらいに青ざめていた。

老婆が何か口にするごとに、大西はさも被災者のような顔つきで、大きく深くうなずくようにした。一般人からインタビュを撮る際の常套手段ともいえる、彼ならではの演技である。大きくうなずけばうなずくほど、答える側は気をよくして、さらによどみなくしゃべる。大西のうなずきの巧きは、局内でも評判だつた。それは彼らにとって、自慢すべき武器の一つであつた。ある酒の席で後輩の一人から「どうしてあんなに上手くうなずけるんですか」と尋ねられたことさえある。酔つた勢いで、大西はこう答えたものである。「簡単さ。相手の身になつてやりゃいいんだよ。相手の傷を自分の傷のように思つてやればいいのさ。そしたら、おまえにだつてすぐにできる。役者と一緒だよ」

心配そうな顔つきで、老婆の息子はインタビュの過程をじつと見守つていた。母親は何度も何度も声を詰まらせながら、その度に前のめりになつて苦しうに咳き込んだ。カメラマンが、「まだ続ける気か」と

言わんばかりに、大西の顔をちらつと見やる。

と突然、家の外で油蟬が一匹、何やら悲しげに鳴きはじめた。その声は、大西たちのいる室内にまで鋭く響きわたつた。この世の果てまで届くかのような、こだまのごとき声である。それに応えるように、別の蟬たちが一匹また一匹と鳴きはじめる。しまいに外は、冬だというのにすっかり夏の蟬時雨となつた。

しかし大西には、蟬に耳を貸す余裕など全くなかつた。肝心の核心部分、まだ聞き出せていなかつたからである。

地震の時の心境を、もつと克明に語つてもらわねば。

そうでなくては、番組にならない。

形にならないんだ。

ここでしつぽを巻いて帰つたら、編集室で無能呼ばわりされてしまふ。

このままだと、笑い者になつてしまふ。

カメラマンが何か小声で囁きかけてくる。しかし、彼の耳には一言も入つてこない。

あなたの気持を番組でうまく代弁してやるよ。

社会的弱者の称号を、あなたにちゃんとかがせてあげるよ。

だから、もつと上手くしゃべつてくれ。

カメラに向かって、もつと頑張つてしゃべつてくれ。

世の中にうまく送り届けてやるからさ。

あなたの思いはよくわかつてる。

だから、安心してこつちに任せるんだ。

さあ、しゃべれ、しゃべれ、しゃべれ、しゃべれ、しゃべれ、しゃべれ。

あともう一步なんだよ。

あともう一歩だけ前に歩み出てくれ。
おい、なんでうまくしゃべれないんだよ。
あなたがちゃんと話してくれないことには、こつちが迷惑するんだよ。

わかってんのか、このクソババア。

自分の内なる声に大西が少なからず驚いた瞬間、息子がカメラ前に突然ぐいと腕を突き出してきた。

「おい、もうこのくらいでええやろ。あんたら、うちの母親を殺す気か」

殺気だったその言い方に、室内は一瞬しんとなった。息子の顔が、大西にはなぜか自分そっくりに見えた。

「これじゃあまるで、罪人扱いやないか」

「いえ、私たちはただ、お母様から今後の災害に対する貴重な教訓を得ようとしているだけでして」

「あんたら、ほんまに誠実なんか。ほんまに真面目なんか」

息子はたたみかけるように声を荒げた。すると大西の喉から、ほとんど反射的に「すみませんでした、もう結構です」という声飛び出した。まるで自分が自分でないようであった。

息子が吐き捨てるようにつぶやいた。

「被災者でもないくせに、わしらの人生、勝手にいじりくさりやがって」

カメラマンはカメラのスイッチを即座に切ると、帰る用意を黙々としはじめた。音声係もヘッドホンを取ると、ブームマイクをいそいそと片づけはじめた。照明係が申し訳なさそうに、手持ちのライトをばちんと消す。老婆も、カメラクルーも、みな一様に少し落ち着いた様子だった。

不安でいっぱいだったのは、大西ただ一人だった。肝心の話がちゃんと撮れているかどうか、気が気でなかったからである。だが同時に、彼はこの家からすぐにでも逃げ出したいくらい仕方がなかった。結局、大西たちは撮影内容もろくにチェックせぬままに、夕闇迫る被災地をすくすくごと後にしたのである。

案の定、持ち帰ったテープをスタッフ全員で試写するやいなや、「これでは物足りない」という批判が相次いで飛びかった。

障害者が被災した際、最も必要とする情報とは何か。それこそが、VTRの焦点だったはずである。にもかかわらず、母親のしゃべりは、「避難すると周囲にご迷惑がかかる」という他人への気遣いにひたすら終始していたのである。

「どういう情報を得ていけば避難を決意したのか、これじゃ全然わからないじゃないか。おい弱者、いったいどういうことなんだ、これは」先輩ディレクターがどなった。上司たちも厳しい表情で、大西の言い分を待った。彼は何一つ言い返すことができなかった。「全くその通りだ」と心の中で繰り返すばかりだった。母親の涙に焦り、息子の激しい一言に動転し、予定していた肝心の核心部分を撮り損ねたことは、どう考えても自分の不手際だった。

カメラを再び親子の家に持ち込むことなど、もはやできない相談だった。そう分かっているながら、大西は再び説得を試みざるをえなくなった。試写の翌日、彼は心臓を高鳴らせながら、親子の門前にまたも立った。思った通り、老いた母親は同じ言葉をひたすら繰り返した。

「前回、全てお話ししたやないですか」

「もう何にも思い出したくないんです」

「この前のお話でご不満やったら、テレビになんか出して頂かなくて結構です」

大西の舌はどンドン空回りしていった。しまいには言葉すら見失うほどであった。

『弱者』パートのVTRは、撮影済みのテープで何とかするしかなさそうだ」

妥協案が出たのは、放送日が間近に迫ったある日の会議の席上だった。きつかけは同僚の一人の発言であった。

「母親が何度か口にしてしているつぶやきをうまく処理すれば、何とか形になるかもしれない」

居並ぶ上司たちは、しぶしぶその意見を受け入れた。しかし、その後も大西は、ことある事に不平を言われ続けた。

「他の人間が取材してたら、間違ひなくもつといいインタビューが取れたはずだ」

「あいつのおかげで、番組全体の質が下がっちゃった」

冬もようやく終わろうとする頃、番組は予定通りに、全国に向けて放送された。放送が始まるやいなや、出社していた制作陣の面々は、休憩室のテレビの前にとやどやと群がってきた。彼らは美酒に酔いしれながら、オンエアーの画面にじっと魅入った。その様子はまるで、魚の群れるようであった。

もちろん、大西もその場にいた。

彼の取材した親子の顔が画面に大きく映し出されたのは、番組の終盤近くであった。

画面から顔をそむけると、大西はその場からそつと席を外した。

あの親子は、もはや「人間」などではなかった。

むしろ、ただの「道具」だった。

もう彼らと会うこともあるまい。

いつも通りの一期一会。
いつも通りの結末のつけ方。

言うに言われぬ罪の念が、胸をじわじわ満たしていく。番組は問題なく終了した。「お疲れさま」の大合唱が局内を駆けめぐる。その歓声から抜け出すと、大西は誰にも知られぬまま、こっそり帰宅の途にいった。

駅に向かって歩きながら、何度も独り言を言ってみる。

「意義深い番組だったじゃないか」

「視聴者のためになる仕事だったじゃないか」

「次なる大災害に備えて考えておくべき様々な教訓が、ふんだんに盛り込まれていたじゃないか」

被災者の顔をいくつも映すことで、重厚なメッセージが全国へとしっかりと発信されたのである。それはまきれもない事実のほうであった。

にもかかわらず大西は、なおもつぶやき続けていた。

できるだけ早く、足を洗わねばならない。

こんなことをやるために、生まれてきたわけじゃない。

番組終了の翌日から、彼はしばらく休みを取ることにした。会社には「胃をひどくこわした」と嘘をついた。疑う者は誰一人いなかった。

休みの間、大西は何度も何度も、同じ夢ばかり見続けた。

それは、とある王妃の死亡事故現場だった。

時刻はいつも、深夜近かった。

ぐしゃぐしゃに潰れた車の中で、彼女の体はべしやんこになっていた。気品にあふれていたその顔も、炎のせいでもはや黒こげである。

無数のパパラッチたちが、その周りをびっしりと取り囲んでいる。

何百というカメラのフラッシュが、ばしばしと闇夜を照らし出す。

「いい感じで潰れてくれてるねえ」と、誰かがくすくす笑う。

「世界に発信するにはもってこいの最期だな」と、別の誰かが囁く。

大西は顔を歪めて、怒りを露わにする。

「おまえらが彼女を殺したんじゃないか」

パパラッチたちが急に手を止め、彼をちらつと見やる。

どの顔にも冷たい嘲笑が浮かんでいる。

「何がそんなにおかしい」と叫ぶと、彼らは一斉に大西の胸元を指さす。

眼を下に向けてみると、彼らのカメラと同じものが、首からだらりとぶら下がっている。

突然、割れんばかりの蝉しぐれが、彼の上に降り注いでくる。

その余韻は、眼を覚ましてもなお、耳に鈍く残ったままであった。

休みはじめて一週間ほどたったある日、同僚がいきなり電話をかけてきた。

「実は昨日、君の取材したあの親子の家の前をたまたま通りがかったんだ。でも、すでもぬけの殻だった。近所の噂によるとね、どうやらあのお婆さん、あの後すぐに亡くなっちゃったらしいよ。もちろん、あくまで噂だけだね。息子さんの居場所も、今や闇の中だつてさ」

受話器を持つ手がぶるぶると震えはじめる。殺人を犯したかのような気分が、全身を一気に駆けめぐる。

しかし、それも束の間のことだった。久しぶりに出社するや、彼は会う人全てに向かつて、いつものごとく快活にあいさつしてみせた。いかにもやる気満々の会社員、といった雰囲気であった。「番組屋になるべくして生まれたきた男」「どんなストーリーでも巧妙にまとめてしまう職人」——入社以来、彼は常にそう評されるべく努めてきた。そうすれば、テレビディレクターとして合格点がもらえるものと信じ切っていたからである。合格点に達しているかどうかだけが、大西の日々の関心事だった。いやむしろ、「人生の関心事だった」と言い換えた方がより正

確かもしれない。

その場その場の規則に応じ、巧く振る舞おうと頑張ってきた。それが当然と、ただ無心に思いこんできた。自分自身をつきぬけてみようとしたことなど、一度たりともなかった人生だった。彼の全性格は、ひたすらそのように作りあげられてきたのである。その裏に潜む闇の深さを最もわかつていなかったのは、他でもない、当の本人だった。

大西がコスモに再びメールを書くことにしたのは、それからしばらくしてからである。

彼からのメールを、コスモはいまだに覚えていてくれた。

さつそく二人は顔を合わせることにした。

待ち合わせ場所は、コスモの望み通り、阿佐ヶ谷の「さまよへるユダヤ人」となった。

東大のキャンパスを歩きながら、大西は再び、あの名曲喫茶のことを考えた。

一週間ほど前、久しぶりに店を訪ねてみたのだった。その日も彼は、未完の作品をかばんに入れて持ち歩いていた。

記憶だけを頼りに、阿佐ヶ谷駅を出て西へと歩きはじめた大西は、しばらく行くうちに、すっかり道に迷ってしまった。自分が一体どこを歩いているのか、皆目わからなくなったのである。

通りがかりの男に店のことを尋ねてみると、男はいかにもぶつきらばうに、すぐ横の空き地を指さした。

「その店なら、去年までここにあったよ」

都内の住宅地にしては珍しく、草ぼうぼうの野原である。モビールのようなものが一つだけ、隅にぼつんと落ちている。どうやら大西は、その空き地の周りをひたすらぐるぐるまわっていたらしかった。

あのコスモという人は、単なる幻だったのだろうか。

「ベンガル菩提樹の会」など、本当はどこにも存在していないのでは

なかるうか。

流々にしろ、本当はただの幻覚だったのであるまいか。

誰かにだまされているだけなのではなかるうか。

本当に自分は、テレビ局なんか勤めていたのだろうか。

今こうして店を探していることさえ、実は妄想なのではなかるうか。

今日もまた、眠り薬が効きすぎているだけのことなのだろうか。

暮れなすむ空の下、彼はそのまま武蔵野のアパートへと独り戻った。

その日もいつものごとく、野川公園は蟬時雨であった。

かばんから小瓶を取り出して、じつと眺めてみる。

残すところ、あと二錠である。

陽の傾きはじめた東大キャンパスは、いまだに蟬時雨のまつた中である。

おもむろに瓶のふたを取り、また一錠飲んでみる。

どうしてわざわざ、これ以上眠くなろうとするのだろうか。

自分でもよくわからない。

葉は残すところ、あと一錠のみである。

記憶ほど、当てにならぬものはない。

初めて会った時、コスモはたしか、全身黒ずくめだったような気がする。墨染めの衣のような布地だったはずである。

上から下まで完全につながっているその服は、女物のようでもあり、

男物のようでもあった気がする。おかげで男装の女性のようにも見えたり、

しきものを掛けていたはずである。

顔全体を格子模様の黒いベールで完璧に隠していたような気がする

(「うちの放送局がすいぶん前に自社制作した、砂漠の民に関する特大ドキュメンタリーの中に、同じような衣装をまとった現地女性が何度も

出てきたな」——「あんな番組がどうしても作りたかったからこそ、これは今の放送局への入社を切望したんだ」——ほんの一瞬、大西はそう回想した)。体の輪郭はいたって女性らしくった気がする。鼻の下と顎の辺りには、何やら髭のようなものを蓄えていた気がする。

客はコスモ一人だけだったはずである。店の隅に座っていたはずである。

テーブルにつく時、「ベンガル菩提樹の会」の方ですよね」と言ってみた気がする。その時、コスモはいったい何と答えたのだろうか。

コスモは最後まで、一言も話をしなかったような気がする。いや待て。

それでは、物語が前に進まなくなる。何かを口にしてもらわなければ困るのだ。さもないと、後で流々に出会いづらくなってしまう。「一言も口にしなかった」では、お話にならないのだ。つじつまが合わなくなるのだ。だがやはり、黙りこくったままだったような気がする。そうだ、

そうに違いない。あの時、私とコスモは、一言も会話を交わさなかった。

しかし、それでは話がつながっていかない。

仕方ない。いつもの手段に頼るしかないさうだ。

コスモと話したあの日の情景を、初めから構成し直してみるとしよう。

この手の作業には、もう慣れたのはずだ。

八年間、そればかりやってきたんだから。

さあ、さっそく構成してみることにしよう。

流々と再び出会うために、『あともう一步』のために。

たとえば、こんな展開はどうだろうか。

たとえば、こんな展開はどうだろうか。

店の外は、まことに奇妙な天気であった。もうすぐ真夏だというのに、急に冬へと逆戻りしたかのような寒さであった。東京はもやに包まれて、

何となくけじめを失っていた。

店内を流れるのは、バッハの『フランス組曲』であった。もちろん、

グールドの演奏である。ドラマチックな展開をひたすら排そうとするか

のようなピアノである。演奏家たる自分の影を徹底的に消し去ろうとでもするかのような、とても乾いたタツチである。

テーブルのすぐ脇に、モビールのようなものが一つ浮かんでいる。

一本の細い糸で、天井から頼りなげに吊り下げられている。

人間らしき形をした、ひどく簡素なモビルである。

胸が振り子になっている。ゆらゆらと左右に揺れている。心許ない揺れ方である。

両手も振り子である。しかしこちらは、二重振り子である。

首を回転軸とする振り子と、ひじの関節を回転軸とする振り子の二つでできているのである。

両足も振り子である。こちらはそれぞれ、一本の振り子である。

股間を回転軸として、やはり左右にぶらぶら揺れている。

ただ振り子をつなげただけなのに、かなり複雑な動きをしている。

コスモがすつと手を伸ばし、モビールの頭を指で軽く弾く。

とてもか細い指である。まるで愛撫するかのようである。

モビルですか。久しぶりだな。

大西が口を開くと、コスモもようやく口を開く。

「科学の世界では、こういう人形を『カオスマン』と呼んだりするんだそうですね。なかなか可愛いと思いませんか。押し方一つで、動きが何万通りにも変わるんですからね」

私にはどれも同じ動きに見えますがね。

「たしかにそうかも知れませんが。でも毎回毎回、違う動きをしているんです。だから好きなんです」

コーヒを頼むと、大西はすぐに本題に入った。世間話をしようにも、話すべきことが何もなくたからである。まずは、男性会員の入会条件

について尋ねてみる。

コスモは自分のかばんを開けると、小さな瓶を一つ取り出した。透明の小瓶の中には、黄色い丸薬がたくさん詰め込んであった。それをテーブルに置くと、コスモは小さく笑い声を立てた。

「Oさんはご自分の眠りに自信がおありですか」

大西にはよく意味がわからなかった。コスモがまた笑い声を立てる。

「質問を変えましょう。眠りは深い方ですか」

さあ、どうでしょう。考えたこともないな。そんなに深くないかもしれない。

風が吹き込んできたのか、モビルがまたかすかに揺れる。なぜかしら、グールドのピアノと調和して見える。

「このお薬、ちよつとここで飲んでみて頂けませんか」

何ですか、これは。

「大丈夫。決して毒なんかではありません。一粒だけで結構です」

困ったな。まだあなたをよく知らないんですよ。信用していいのかな。

「これを飲んで下さらなければ、当クラブへの入会は許可いたしかねます」

ようやくコーヒが運ばれてくる。一粒だけ瓶から取り出すと、大西は仕方なさそうに口に入れてみた。何の味もしない。コーヒと一緒に、そのまま飲み下す。

「実を言いますと、男の方にはぐっすり眠って頂かなくてはならないんです」

そう言つて、コスモは一つ咳払いをした。

「例会の場所は、サイトに書きましただ通りです。都内でもあまり知られていないお寺でございます。私どもの『セッション』は、毎月そこで行われております。ちなみにですが、肉の交わりのことを、我々はいつも『セッション』と呼び慣わしております。どうかお見知り置き下さい。

今月は、男女あわせて十名の方がお越しになる予定です。『セッシヨン』の間、男性の皆さんには床に就いたまま熟睡して頂きます。途中で起きるようなことが決してないよう、『セッシヨン』前に必ずこの薬を服用して頂きます。あとは女性の皆さんが、ご自身の体のリズムにしたがって、各男性の体の上を順々に渡り歩いていかれます。一人の体の上で念入りに時を過ごされる方もいらつしやいますし、もちろん次々に相手を変えていかれる方もいらつしやいます。全員の肉体が交わり合ったところで、いつも散会といたしております」

コーヒーの濃い香り。ゴールドの乾いたピアノ。モビールのかすかな揺れ。時に幼児のようで、時に老婆のような、コスモのささやき声。

大西の視点は少しずつ、ぐらつきはじめていた。

「このお薬には幻覚作用がございます。ふだん見えないものが、だんだんと見えてまいります。相手の女性の波長とご自身の波長がうまく調和なさいますと、それはそれは生々しい幻が眼の前に開けてまいります。眠っているとは思えないほどの幻です。言語を超えた世界です」

コスモの姿が、だんだん黒い塊のように見えてくる。

「体に害はございませんが、それでもやはり心苦しく思われる方がいらつしやいます。そんな方には、入会をご遠慮頂いております。幻覚を存分に楽しめる方のみ、お越し頂いております」

何とも言えない眠気が、心の奥から波のようにやってくる。

そうか、これはテストなのか。

大西は必死で両眼をこじ開けようとした。

「ここでちよつと脱線して、我々の会の歴史について少しお話しさせていただきます。唐突ですが、ベンガル菩提樹がどんな木か、Oさんはご存じでいらつしやいますか」

大西はただ、知らない、とだけ答えた。うまく言えたかどうか、自分でも少々怪しかった。

「南の島に行きますと、よく見る巨木でございます。不思議なことにその木の蔓は、根と同じ働きをするんです。幹からぶらぶら垂れ下がってきてまして、地面によく触れますとね、今度はそこからゆつくりと、地中に根を張りはじめなんです。蔓は無数に絡まり合いながら、ゆつくりゆつくり木のような形状へと近づいていきます。まさに新たな木の誕生です。もちろん、気が遠くなるほどの日数が必要となります。しかし、時間さえ惜しまなければ、一本の木から森が生まれるんです」

コスモのささやきはよどみなかった。大西は聞き惚れはじめていた。

「実は我々も、そうありたいと願っているのです。驚かされるかもしれませんが、我が我々の歴史はわりと古く、誕生以来、すでに一世紀近くが経とうとしております」

「我々は世界的な結社です。発祥は東ヨーロッパでして、本部は今もそこでございます。十九世紀の終わり頃、かの地におきまして、全世界共通の言語を創ろうという機運が高まったことがございます。その結果として生まれましたのが、おそらくご存じのことと思いますが、エスペラント語でございます。一から十を、*dek, nau, ok, sep, ses, kvin, kvar, tri, du, unu* と数える言語です。国も人種も全て超越してしまおうという、こうした動きに連動する形で、われわれ『ベンガル菩提樹の会』もまた生まれたのでございます」

「現在、かなりの国に支部がございます。日本国内だけでも、いくつか支部がございます。ちなみに各支部のリーダーは、みなコスモという称号を名乗っております。全て一本の木から、すなわち、一本の精神から生まれ出た共同体でございます。エスペラント語は言語によって、われわれは互いの肉体によって、この世の全ての境界を超えていこうとしているのでございます」

かなりいかかわしい集団だ。

ぼんやりしながら、大西は心の中でそうつぶやいた。

こいつの言っていることは、おそらく全てでたらめだ。このまま行くと、何かとてつもないことに巻き込まれてしまう気がする。こんなところに来るんじゃないかった。こんな人間に会うんじゃないかった。

コスモの声はあまりにも心地よかった。大西はこうも考えはじめていた。

もしこいつの言っていることが真実だとしたら、案外、次の番組のネタになるかもしれない。こいつらの行動をカメラで追っかけて、ドキュメンタリー番組にでも仕立ててみたら、もしかすると、わりと面白いものができあがるかもしれない。幸い、自己紹介のメールを書く時、こっちの職業については一言も触れずにおいた。このままひた隠しにして、しばらく関係を続けてみるとうしよか。

しかし、とにかく眠い。大西は再び、必死で眼をこじあげようとした。コーヒーのアロマが、また一段と鼻をくすぐる。コスモはなおも、話し続けていたらしかった。

「エスベラント語と同じく、我々もこれまで数多くの迫害を受けてまいりました。世界を一つにしようとする集団は、全く同じことを考える為政者にとりまして、常に脅威でございませす。ヒトラーやスターリンの時代には、虐殺行為のせいで、未曾有の数の死亡者を出したりいたしました。それは我々にとりまして、先日の神戸の地震のごとく、まさに壊滅的な打撃でございました。しかし幸運にも、何とか生き延びることができました。世界を一つの森にすべく、今も日夜励んでおります。互いが互いを与え合う、愛という名の森でございませす」

「日本に最初の支部ができましたのは、第二次世界大戦直後でございませす。できました当初は、ご主人を亡くされた戦争未亡人の方々に、性の喜びと連帯感の温かみを存分に感じて頂こう、というのが主な目的でございませす。男性会員のほとんどが元兵士、という時代でもありません。傷つき疲れた体を引きずり、死ぬような思いで内地に戻ってこられ

た方々ばかりだったので。そんな方々にこそ、人間同士のつながりをもう一度確認して頂き、互いの心を慰安しあって頂きたかったのです。つまり当時の我々は、いわば慰安夫と慰安婦の共同体だったのでございませす」

「時代の変化とともに、それは様々な種類の方々がお越しになるようになりました。政治家や財界人もよくお越しになりました。学生活動家や自称ヒッピーもよくお越しになりました。猛烈サラリーマンも専業主婦もたくさんいらっしゃいました。日本人・非日本人を問わず、本当にいろいろな方々が今までお越しになりました。難病を抱えていらっしゃる方々も、俗に『異常性愛』者と呼ばれがちな方々も、社会の差別にいろいろと悩んでいらっしゃる方々も、そして、亡くなる間際の自称『瘋癲老人』という方々も、わざわざお越しになって下さいました。世間一般の物差しで測るなら、ある方は『多数派』に、ある方は『少数派』に属していらっしゃいました。『持てる者』ももちろんいらっしゃいましたし、『持たざる者』ももちろんいらっしゃいました」

「けれどもここでは、そんな違いなど、もはや一切無意味なのでございませす。いったん『セクション』が始まれば、皆さん、ただのまる裸なんです。ここでは肩書きなど必要ありません。大切なのはむしろ、匿名であることなのです」

もはや、先ほどまでのコスモではなかった。その輪郭だけを残して、コスモは単なる一枚の幕と化してしまっていた。人間の形をした黒幕である。まるで映像用のスクリーンのようにも見える。

「これしきのごとく世界が一つになるわけがない——そうお思いになつていらっしゃるかもしれません。でも、実はそうとも言い切れないのです。たとえば今、蝶が一匹、この場で羽ばたいたとします。たったそれだけの動きが、巡り巡って、別の場所に巨大な竜巻を生み出す可能性だって、ちゃんと実在しているのです。〇さん、世界はこんな風につな

がつているのです」

店の入り口付近で、電話のベルがけたたましく鳴る。コスモが一礼して席を立つ。

「はい——ええ、こちら東京は順調です——それより、ニューヨークとモスクワの状況はいかがですか——インドとエジプトは——そうですね、それは何よりです」

受話器を持って立つコスモの姿が、大西にはまるで影絵のようであった。

「それでは次に、Oさんご自身のことを少しお尋ねしたいと思います。と言っても、先にお送り頂いた長いメールで、Oさんの人となりについては、すでにかなり把握させて頂いております。ですから今日は、肝心なことを少々お聞きするだけに留めます。入会して頂くかどうかは、お別れの際に申し上げることにいたします」

そこまで一気に話すと、コスモはちよつと考え込んだ。

「そうそう、大事なことを忘れておりました。あと少々、この会の決まり事を事前にお伝えしておかなくてはいいけません」

グルードのピアノが耳をくすぐり続ける。大西はようやく、何でしよう、と声に出して答えた。

「いったん入会して頂きましたら、お亡くなりにならぬ限り、生涯を通じてずっと会員扱いとなります。個人的な事情で、何十年もお越しにならない場合でも、再び来ていただくことはもちろん可能です。『セツシヨン』の参加料は、サイトにも書きました通り、一回につき五万円でございます。お越しになった際、お支払い下さいませ。それ以外に負担していただく必要は全くございません」

「それと、これも重要な規則でございますが、『セツシヨン』以外の場所で会員同士が個人的な肉体関係を持つことは、固く禁じられております。たとえ特定の女性と懇意になりたいとお思いになりましたら、

『外』では絶対にお止め下さい。われわれ共同体の理想を冒涇する行為とみなして、脱会して頂くのはもちろんのこと、処罰の対象ともいたしますので、どうぞそのおつもりで」

一体どんな処罰ですか、と尋ねようとして、大西の舌はひどくもつれた。おかげで、声がうまく出ない。

『セツシヨン』の際に避妊具を使うのも厳禁でございます。体外射精ももちろん厳禁でございます。わが会は避妊行為を一切認めておりませんので、どうぞそのおつもりでいらして下さい」

それは危険だ、と答えようとして、大西の舌はまたひどくもつれた。「女性の方々の中には、妊娠の危険を承知で参加なさる方が多くいらっしゃいます。なかには、妊娠をわざわざ望んで参加なさる方もいらっしゃいます。もちろん、実際に妊娠なさる方も多くいらっしゃいます」

「妊娠なさった場合は、絶対に墮胎することなく、ちゃんと生んで頂かなくてはなりません。生まれてきた子供は全員、『ベンガル菩提樹の会』の子供として、生涯を全うして頂くこととなります。女性会員が勝手に墮胎をお考えになったりした場合、あるいは、特定の男性会員と勝手に二人きりで子供を育てようとなさったりした場合は、これまた脱会はもちろんのこと、処罰の対象とさせていただきます」

蟬時雨はなおも続いていた。夕日がうつすらと、東大の時計台にあたってゐる。

総合図書館へ戻った大西は、コンピューター検索コーナーの前でふと足を止めた。もしかすると、流々のその後の足跡がここで探し出せるかもしれない。そう考えたからである。

あの頃、彼女は精神的に詩作に励んでいた。短歌や俳句を作ることもあった。満足いく作品ができると、きまつてとある文芸誌に投稿することになっていた。海外の作家の短編小説を試みに翻訳しては、それ

を投稿したりもしていた。

大西も彼女の作品を何度か読んだ。しかし、当時の彼にとつて、流々の作品はわかりにくいものばかりだった。素直にそう感想を述べると、彼女はいつも静かに微笑んで、「気にしなくていい」と言った。もちろん、口で言うのではない。眼で言うのである。

舌のない彼女にとつて、口はもはやしゃべるための器官ではなかった。だから彼女は、よく筆談を試みた。眼が筆談の代わりを果たすこともままあった。書くのが面倒くさくなると、眼だけで語ろうとするのである。その眼が彼には、なぜか読めるような気がした。彼女もすかさず、「だからあなたを選んだのだ」と眼で返した。そして裸のまま、同じく裸の大西に再び絡みつくのだった。二人きりで過ごした二週間は、ひたすらそんな日々の連続であった。大西は会社を無断欠勤し、彼女の部屋にずっとこもりっぱなしとなった。彼女も彼女で、どこへも行こうとはしなかった。二人は朝から晩まで部屋から一歩も出なかった。そしてずっと、裸のままだった。部屋のいたるところで、二人は何度も何度も交わりあった。時にはベッドの上で、時にはバスルームで、時には絨毯の上で、時には玄関で。二人はまるで、繭の中に絡まりあつて暮らす、双子の蛾のようであった。

どうしてあんな日々が可能だったのであろうか。どうしてあんなに長いこと、放送局を休めたのだろうか。買い物に行かず、外食もしなかったというなら、いったい食事はどうしていたのだろうか。彼女にだって、やるべき仕事は山ほどあったはずである。一体全体、彼女はそれらをどう処理していたのだろうか。どうしてあんなに数え切れないほど、交わりあうことができたのだろうか。

少しずつ、少しずつ、流々のことが心の中に蘇ってくる。しかし、もつぱら蘇るのは、「あの頃二人は何をしていたか」ということばかりである。二人の行為のリストなど、もはやどうだっていいはずだ。欲しいのはむしろ、彼女の全身そのものはずである。彼女の身体の感触、そ

の存在の重みのはずである。なかなかその像がうまく結べない。肝心の部分が戻ってこない。もう少しなんだが。あともう一歩なんだが。

それにしても眠い。もしこれが眠り薬による妄想だったとしたら、一体どうするつもりだ。もしもこれが単なる夢だったとしたら、一体どうするつもりだ。もしかすると今までの記憶は、全て真つ赤な嘘なのかもしれない。今こうしてキャンパスにいること自体、ただの嘘なのかもしれない。もしかすると本当は、どこかのベッドでぐっすり眠りについてしまっただけなのかもしれない。「自分は起きている」と、勝手に誤解してしまっただけなのかもしれない。

誰かが私の人生を勝手に編集し、勝手に現在の形へと収斂させてしまったのかもしれない。編集の過程で削り落とされたものを、もう一度よく点検してみるがいい。そこには今とは全く違う、別の私がいるはずだ。頼むから、それを返してくれ。一つに収斂するなんて、まっぴらごめん。ぐちゃぐちゃなままでいいから、とにかく全部返してくれ。放送局にも入らず、コスモにも流々にも会わず、大学院にも入ることなく生きてきたはずの別の私の姿の全てを、今すぐここで耳をそろえて返してくれ。もうこれ以上、他人の人生を好き勝手にまとめ上げようと企むのはよしてくれ。もうこれ以上、他人の生き様のありように、波瀾万丈や起承転結をおもしろおかしくあしらおうとするのはやめてくれ。

大西は急に、流々の詩が読みたくてたまらなくなつた。この図書館のどこかに、彼女が投稿していた文芸誌が束になって眠っているはずだ。特に読みたいのは、彼女の最後の作品だった。そこには死ぬ間際の彼女の思いが、間違いなく凝縮されているはずであった。

おそるおそる、検索システムに流々の名を入力してみる。「検索実行」をクリックする瞬間、無性に胸が高鳴つた。生まれて初めて、流々に出会うかのような気分である。

あの「セツシヨン」の最中も、やはりこんな気分だったのであろうか。

集会場所となつてゐる寺は、都心の一角にひっそりと建つてゐた。山門らしきものが設けてあり、それをくぐり抜けるとすぐに境内だった。中央の仏殿には、本尊らしきものが置かれていた。おだやかな顔の仏であつたが、いかにも凶暴そうな獅子が一匹、その頭の上にちよこんと乗つかかつていた。「身心凝然」「事事無礙」と大書された巨大な額が、天井に二枚掛けてあつた。

仏殿の裏手にはこんもり茂る森があつた。なだらかな傾斜の参道がその中を細く貫いていた。無数の赤い鳥居がその小道を覆い尽くしている。この道を歩む者は、その下をくぐつていかねばならなかつた。まるでドミノのように、鳥居の群れは山頂へ向かつて延々と続いていた。まさに真っ赤なトンネルである。

その中を、大西はのろのろ歩き続けていた。ようやく山頂が見えてくる。葬儀場らしき建物が一つあつた。筆で「無戸室」と記してある。わざわざ「うつむろ」とルビまで振つてある。間違いあるまい。コスモのサイトに載つていた会場とは、きつとここだ。

入り口のすぐ横に、無縁仏のための巨大な土饅頭が立つてゐる。どうやら、水子供養のためのものらしい。喫茶店でコスモから聞いた話が、ふと思ひ出されてくる。

「妊娠なさつた場合は、絶対に墮胎することなく、ちゃんと生んで頂かななくてはなりません」

理由もなく、故郷・広島の平和記念公園のことを思い出す。あそこにもたししか、無縁仏のための土饅頭があつたはずだ。このこと同様、緑に包まれた土饅頭であつたはずだ。

矢印に従つて中に入ると、いきなり右側にシャワー室が設けてあつた。

高級ホテルのシャワールームのような、広々とした作りである。誰もいないのをしつかり確かめてから、内部をこっそり覗き込んでみる。

シャワーは全部で五つ。どのドアも、中が透けて見える作りになつてゐる。タイルは完璧に磨き抜かれており、塵一つ落ちていない。香りのよいタオルがいくつも置いてあり、シンクもいたつて使いやすくてきてゐる。どう考えても、古臭そうな寺の外観にはあまりに不似合いの部屋である。

突然と立ちつくす大西の背を、誰かが軽くぼんと押した。振り返ると、コスモが立つてゐる。喫茶店で会つた時と、全く同じ出で立ちである。

「ようこそ、Oさん。ではまず、ここで体をきちんと清めて頂きます」
「ここで、ですか」

「そう、『セツシヨン』はあちらの奥の部屋で行われます。その前にみんな、まずここで清めるんです」

「みんな、といたします」
「今日お越しの皆さんです。葉はもうお飲みになりましたか」

「ああ、この葉ですか」
「いいえ、実はまだです」

「そうですね。では、いったんこちらへお戻り下さい」

「またもや建物の外に出る。ふと見ると、大西はいつの間にか左手に、水の入つたコップを一つ持つてゐる。一方、右手は財布を握りしめてゐる。そんなコップ、さつきは持つてなかつたはずだ。いつどこで手にしたんだろう。いつ財布を取り出したんだろう。」

「さあ、ここでお飲み下さい。『セツシヨン』代の五万円はたしかに頂戴いたしました」

一粒取り出して、水と一緒に口に含む。そして一気にぐくりと飲み込む。太陽の光が眼にまぶしい。森の中から、鼓膜をかきむしるような音が一斉に響きはじめる。無数の蝉たちが、同時に鳴きはじめたのである。

とたんに世界のありようが、大西の中でぐらりと揺れはじめた。コスモの手が彼の手に軽く触れる。幼児のような手から、老婆のような臭気がほのかに漂ってくる。その手に導かれるようにして、またゆつくりと歩きはじめる。そして再び、「無戸堂」の中へと引き返していく。

無人だったはずのシャワー室から、えらく賑やかな声が聞こえてきた。五つのシャワーは、すでに全て使用中となっていた。そのうち四つには、男女が一組ずつ入っていた。残りの一つは、まだ一人きりの様子であった。

四組の男女は頭から湯を浴びながら、じゃれ合うように全裸の体を洗いあっていた。その様子を大西は、しばらくの間じつと眺めた。どのドアも、次第に湯気で曇っていく。まもなくすると、彼らの姿は全く判然としなくなつた。

一人きりで浴びているのは、どうやら女らしかった。体の隅々をくまなく石鹸で洗っている様子である。その女を、コスモは無言で指さした。

「あの人と一緒に浴びるんですか」

こくりと頷くと、コスモはそのまま建物の奥へと無言で去っていった。大西がコスモを直に見たのは、この時が最後である。

服を脱ぎ、女のドアへと近づいていく。いつもに比べ、足取りがかなり軽い。まるで地面から、足が離れかかっているような歩き方である。ノックするのに少々勇気が要る。ドアはすぐに開いた。

湯気の間こうに立っていたのは、全身真っ黒の女性であった。舌を出したままの唇の絵が、背中に大きく入れ墨してある。真っ赤な舌が、黒い肌の上をべろりと垂れている。ローリング・ストーンズのロゴにそっくりの絵である。

「こんにちは。初めて見る顔ね」

「ええ、そうです」

「洗ってあげる。もっと近寄って」

彼女に寄り添うようにして立つ。湯は適温である。石鹸を取ろうとして、一瞬、彼女が背を向ける。巨大な舌が、まるで食らいつこうとでもするかのように眼の前に広がる。どうやら、丁寧語でしゃべり合うような雰囲気ではなさそうである。

「薬はもちろん飲んでるよね」

「うん、飲んで」

「そう。じゃあ今、幻覚の最中ね」

「そういうことになるかな」

「もしかすると、このわたしも幻覚だったりして」

はははと声をたてて笑うと、ゆつくり大西の手足を洗いはじめる。美人とはとても言いにくい顔立ちである。しかし、全体的には艶やかさの漂う体つきである。コスモの選び方の規準と、巷の「美人」の規準との間には、どうやらずれがあるらしかった。しかしとにかく、この黒い女は、間違いなくなまめかしかった。

「薬ね、わたしも実は飲んでるの」

「どうして。飲むのは男だけじゃないのかい」

「わたしね、男の人はだめなの。女の人とだけなの。飲んで飲まなくても本当は構わないんだけど、今日は男役で行きたいから、思い切って飲んでみた」

「じゃあ、もしかすると、この俺も幻覚だったりして」

二人は互いに、はははと笑った。

「黒いんだね」

「わたしね、実はヒップホップのダンサーなの。昔はあなたと同じ色の肌をしてたんだけど、ダンサーはやっぱり黒くないと。だから手術して、全身の皮膚を入れ替えてもらったの。おかげで今じゃ、こんなに真っ黒。どう、きれいでしょ」

「ああ、まさに黒人だ。顔からしてまさにそのものだ。もしかすると、本物の黒人なんかよりよっぽど黒いかも知れない。でも、どうしてダン

サーは黒くないやいけないの」

「手術の前までは真剣にそう思いこんでたのよ。プロのダンサーになるなら絶対に黒い肌、ってね。でも今じゃあ、ちよっと後悔してる。黒い肌は今でも好きよ。そうじゃなきゃ、コスモさんにも親近感なんか湧かなかったろうしね」

「そうか、あの人も黒いのか。全く気づかなかった」

「噂ではね。でも、本当のところは誰にもわからないの。たぶん誰一人、素顔を知らないんじゃないかな。この国の人ではないらしいよ。それだけは確か。どこか遠くから来たんですって。いろんな言語がしゃべれる、って話も聞いたな」

「最初に会った時、この会の歴史をあれこれ教えてくれたけど、それと関係があったりするのかな。エスぺラント語がどうしたとか、東ヨーロッパがどうしたとか、いろいろ言ってたでしょ」

「へええ、あなたにはそんな話をしたんだ。わたしにしてくれた話とは、やっぱり全然違うな。とにかくね、あの人のについては、いつも噂しかないのよ。会員一人一人に、全然違う話をしてるみたいなの。どれが本当か、もう誰にも見当がつかなくらい」

「たとえば」

「わたしが喫茶店で聞かされたのは、こういうやつ。アメリカ力で昔、公民権運動ってというのがあったでしょ」

「あまりにも場違いな言葉に、大西は一瞬あつげにとられた。二人とも全身泡だらけである。女の胸が、彼の肌の上をやさしく滑っていく。」

「コスモさんってね、その運動のリーダー格の一人だったんですって。

非暴力・不服従っていう、例のやつ。KKKっていう組織があるでしょ。白い頭巾で顔を隠して、火のついたトーチ片手に持って、黒人を一人一人痛めつけてまわるっていう、映画によく出てくるあの人たち。その人たちにもね、ずっと追われてたんですって。昔は毎日『We Shall Overcome』って歌ってたらしいし。黒人の歴史についても、いっぱい

教えてくれたわ。北極星めざして南部から逃げた奴隷たちの話とか、『地下鉄道』っていう秘密組織の話とか、ハーレム・ルネッサンスっていう時代の話とか、マルコムXっていう運動指導者の話とか、本当にいろいろとね。それでわたし、この人はすごいって思ったの。だからこの会に入ろうって思ったの。いかがわしいことだって、別に嫌いじゃなかったしね」

「でも今は、少し後悔してるんでしょ、この黒い肌を」

彼女の肌を撫でてみる。シャワーの湯が、全身の泡を洗い流しはじめる。

「ちよっと前にね、コスモさんからかなりきつく言われたの。他人は他人、自分は自分だって。所詮、他人と自分は違うんだって。親からもらった自分の肌は絶対に大切にされた方がいいって。他人の色に染まる必要なんか全然ないって。世界は一つなんかじゃないんだからって」

「俺にした話と、ひどく違うなあ」

「でしようね。そういう人なのよ、あのコスモさんって。別のメンバーによるとね、あの人は本当は白人なんですって。色つきの肌に対しては、すごく不公平なんですってよ。『白人こそ世界最高』って言い切ってたらしいし。そう言ってたメンバー自体、実は白人なんだけど。ほうら、ますます得体が知れなくなってきたでしょ。だけど、なぜだか縁が切れないんだな。それで結局、こうして毎回来ちゃう、ってわけ。中にはね、コスモさんのことを『哲人王』って呼ぶ人もいるくらいなのよ——もちろん、冗談交じりにね」

他の四組はすでにシャワーを終えたらしく、奥の部屋へと移動しはじめていた。そろそろ「セッション」の始まる時刻らしい。大西と黒い女も、互いの体を拭きはじめた。

「今日はあともう一人、初めての参加者がいるの」

「男かい、それとも女かい」

「女よ。わたしの幼なじみ。ここではRって呼ばれるらしいけど、本当の名前はルル」

「やっぱりダンサーかい」

「ううん、物書き。自分で詩を書いたり、外国の物語を翻訳したりして暮らしてる、けっこう面白い子。私とは全くの畑違い」

「幼なじみか。じゃあ、ここには君が誘ったわけだ」

「まあね。実は同じ島の出身なの。昔から仲が良くて」

「島か。どこの島」

「神島って知ってるかな。伊勢湾に浮かんでる、小さな小さな島」

「もしかして、三島由紀夫が自分の小説の舞台にした島かな」

「そう、『潮騒』。それにしてもびびり。よく知ってるわね。神島を知ってる人なんて、東京には誰もいないと思ってる」

神島。それは大西にとつて、久しぶりに聞く地名であった。

入社してから何年目のことだったろうか。一足早く夏期休暇をもらおうと上司にかけあつた彼は、逆に彼から、休み中の「課題」を命じられるはめになつた。

「休みが明けたら、紀行番組を作ってもらうぞ。テレビ的に面白そうなのロケ現場を一つ考えといてくれ。ただし番組の性格上、国内に限る。島巡りなんかいいかもな。休みの間はどこかの島でも訪ねて、旅行がてら取材の真似事でもしておくといい。主人公になりそうな人間の目星までつけてこられたら、ベストなんだがな」

たしかにその通りである。前もって現場をロケハンしておけば、休み明けのロケ準備はかなりはかどるに違いない。だが、大西はいつになく、「嫌です」と怒鳴りたくてたまらない気分だった。「わかりました」と答えはしたものの、いつものように物わりのよい部下を演じた自分が情けなくて仕方なかつた。「飲みに行こう」という周囲の誘いを全て丁重に断ると、その日は普段より早く放送局を後にした。

どうして「嫌だ」と叫びたくなつたのだらう。帰る道すがら、大西はこれまでの年月を気の向くまま思い起こしてみた。今まで手がけたドキユメンタリーの主人公たちが、まざまざと脳裏に蘇ってくる。

全てをなげうち、精神を病んだ妻に献身的に尽くし続ける元空港検査官。

難病のせいで眼球を除く全ての筋肉が麻痺したものの、次第に眼球の動きだけで母親とコミュニケーションが取れるようになり、しまいに作曲活動まで始めた少年。

幸い、彼らの「物語」はどれも一応の評価を得ることができた。だが大西は、いつも独特の疲れに苛まれていた。彼らの多面的な生涯をただ一点に凝縮し、ブラウン管の向こうのお客様に「商品」としてお見せする、あの何とも言えない徒労感。あの感覚をまた経験せねばならぬのか・・・そう思うだけで気持ちが悪えた。叫びたくなつたのは、どうやらそのせいであつた。これだけキャリアを積んだのに、いや、逆にキャリアを積み積むほどに、この感覚はますます鋭敏になりつつあつたのである。

休みの前日、部屋の本棚を何気なく眺めていると、背表紙のすつかり擦り切れた文庫本がたまたま視界に入ってきた。何だつたらうと手にとると、それは三島の『潮騒』であつた。久しぶりに、ばらばらページをめくってみる。すると偶然、主人公の青年と海女の処女が初めて抱擁する場面に出くわした。

絶海の孤島を包み込むように、吹き荒れる夜の嵐。若き新治はただ独り、豪雨にすぶぬれになりながら、集落の反対側にある「観的哨」へと歩いていく。「観的哨」とは、対岸からの試射砲観測のために設けられた戦時中の軍事施設のことである。終戦とともに無用の長物と化し、廃墟となつたこの小屋に着くと、彼は集めた松葉に火をつけ、暖を取りながら初江の来るのを待つ。思わず眠り込んだ彼がふと眼を覚ますと、いつものまにかあの向こうに彼女が立っている。濡れた衣服を乾かすべく、

上半身をすっきり露わにしている初江の美しい裸体に、新治は思わず息を飲む。新治の視線に気づくや、初江は慌てて「眼を開けるな」と叫ぶ。新治はすくと立ち上がり、「どうすれば恥ずかしくなくなるか」と初江に尋ねる。すると初江は「あなたも裸になれ」と答える。「おまえが下の肌着も取るなら、俺も禪を外す」と新治が言い返す。かくして二人は真っ裸となり、炎をはさんで対峙する。

このとき急に風が、窓の外で立ち込めた。それまでも風雨はおなじ強さで廢墟をめぐって荒れ狂っていたのであるが、この瞬間に風はたしかに現前し、高い窓のすぐ下には太平洋がゆったりとこの持続的な狂躁をゆすぶっているのがわかった。

少女は二三歩退いた。出口はなかった。コンクリートの煤けた壁が少女の背中にさわった。

「初江」と若者が叫んだ。

「その火を飛び越して来い。その火を飛び越してきたら」

少女は息せいてはいるが、清らかな弾んだ声で言った。裸の若者は躊躇しなかった。爪先に弾みをつけて、彼の炎に映えた体は、火のなかへまっしぐらに飛び込んだ。

炎へ向かつて突進する新治の四肢が、大西の眼球の奥底を閃光のごとく横切った。そして、炎を飛び越えんと跳躍するまさにその瞬間の彼の姿が、心の表面に残像となって浸透していった。得体の知れない酔いに襲われて、大西はその場にしばし立ちつくした。男女の愛の神聖さに心を奪われたからでは決してない。「飛び越えろ」という言葉と行為そのものが、彼を急に激しくとらえたのである。

新治のように、私も軽々と飛び越えてみたい。けれども一体、何をそ

んなに飛び越えたいと思っているのだろうか。

この小説の舞台となったのは、たしか伊勢湾に浮かぶ孤島、神島であった。

そうだ。あそこへ行こう。何かとてつもないものが、あそこで私を呼んでいるような気がする。三島もおそらく見たであろう、いわく言い難い不可思議な光景が、あそこで私を待っているような気がする。そう直感するすぐ隣で、さっそく別の自分が打算を開始する。

「上司が求めているロケ地は島だ。神島はまさに打ってつけの場所ではないか。三島の小説をストーリーの軸に据えさえすれば、番組の構成に悩み苦しむことだってそうそうあるまい。編集作業も楽そうだ。『潮騒』の島で云々という具合に、副題も簡単に決まるだろう」

大西はようやく、旅行の準備にとりかかった。そして翌日、ガイドブックなど一冊も持たぬまま、神島行きの港がある三重県の鳥羽市へと一路向かったのである。

黒い女と大西は肩を並べながら、「セツション」の行われる奥の部屋へと歩きはじめた。

彼女の前を歩いているのは、別の二組の男女であった。一方の男女は、後ろを歩く黒い女の舌の入れ墨にいたく興味をそそられたのか、ローリング・ストーンズのヒット曲のことを声高に話していた。サティス・フアクション。ホンキー・トック・ウイメン。悪魔を憐れむ歌。プラウン・シユガー。ストリート・フアイティング・マン。様々な有名曲のタイトルが大西の耳に飛び込んでくる。もう一方の男女とはいえば、女の方が「ここはまるで一種のポリスね」と繰り返して、たしかロックバンドで幼そうな男の方が、それに対して「ポリスって、たしかロックバンドでしょ? 『見つめてほしい』っていう有名な曲があるけど、あれを歌ってた三人組だよな? — それとも — ここってまさか、警察とマジで何か

関係あるの？」と妙にはしやなぎながら答えていた。

そして——黒い女は、なおも小声で話し続けていた。

「どう、かなり眠くなってきたでしょ」

「ああ、眠い。このまますぐ眠れそうだ」

「ルルちゃんが上にきたら、優しくしてあげてね」

「優しくしたって、こっちは眠ってるんだよ。君以外にも、女性は四人いるんだ。誰が誰やらわかりやしないさ」

「そうかな。たぶんわかると思うよ」

「どうしてそう思うの」

「舌を入れてこないのは、絶対にあの子だけだから」

「舌が入るかどうかで、相手の区別なんてできやしないよ」

「あとは、あなたの気持ち次第。とにかく、優しくしてあげてね」

大西の視界はすでにかなり朦朧としていた。黒い女が静かに部屋の扉を開けた。奥の方に、裸の尻らしき丸いものが幾つかおぼろげに見える。

「ルルちゃんね、実は舌がないの。だから、他の三人とはちょっと違うはず」

「手術でもしたのか」

「ううん、違う。自分の歯でかみ切っちゃったの。かみ切れなかったところは、自分で根元から引き抜いちゃったの。舌のちようど真ん中あたりね、黒い斑点みたいなものがいっぱいできてたんだって」

「そんなことして、なんでまだ生きてられるの」

「ね、面白いでしょ。すごくいい女よ。恋人はちゃんと別にいるんだけどね」

黒い女はにこりと笑うと、ふらふらした足取りのまま、部屋の中へと消えていった。背中舌が、まるで生きてくるかのようである。大西の足もふらついている。それでも構うことなく、中へと進む。

部屋に入るやいなや、妖しげな音楽が耳元に響いてきた。聞いたこと

のある曲である。ピートルズの「レボリユーション9」ではなかるうか。「No. 9. No. 9. No. 9.」の単純な繰り返しが、彼の眠りをさらに加速させていく。誰かが寢床の一つを指さしている。どうやら「そこに寝ろ」と言っているらしい。言われた通りになる。まもなくして、大西の視界はつるべ落としのごとく暗転した。

「セクション」はすでに始まっている様子だった。しかし大西は、とある駅の改札前に一人きりで立っていた。これもおそらく、幻覚の一つなのだろう。そう確信しながらも、とりあえず駅の外を一瞥してみる。あらゆる建物が、半壊もしくは全壊している。大規模なテロでもあったのだろうか。核爆弾でも炸裂したのだろうか。それとも、大地震だろうか。木枯らしが断続的に吹きぬけていく。空は一面、暗く濁っている。駅前から遠く海まで続く大通りの到るところに、巨大な瓦礫が散乱している。ペシヤンこに潰れたまま、自動車が数台放置されている。大西はかなり酔っている。自分でも全く理由が思いつかない。とにかく、ひどく酩酊している。酔った眼を凝らし、再び辺りを見渡してみる。長い行列が見えてくる。酔った眼の上を果てしなく続く、無数の人間の列である。被災した人々であろうか。駅の周りに眼を向けてみる。仮設トイレがいくつか立っている。どうやらこのトイレを待っている行列らしい。どのトイレもすでに許容量をはるかに越えているらしく、人糞が便器から溢れかえっている。文句を言う人間は誰一人いない。下を向いたまま、順番が来るのを辛抱強く待っている。木枯らしがまた吹き抜けていく。包帯を顔にぐるぐる巻いたまま、簡素な机に腰掛けている警官がいる。たったひとり、必死でペンを走らせている。彼の前にも行列ができていた。行列の中の一人がうめきはじめる。水ヲ下サイ。すると皆が一斉にうめく。水ヲ下サイ。何か一枚書きたびに、警官が大声で叫ぶ。罹災証明が必要な方はこちらまで来て下さい。皆さん、罹災証明はこちらです。大西は、だんだんいたたまれなくなる。くるりと振り返り、そのまま改札を

抜け、駅の構内へと入る。プラットフォームは押すな押すなの大混雑である。被災後初めて列車が入ってくるらしく、それに乗ろうとする人々で、どこもかしこもごった返している。足の踏み場もない。人波をかき分けるようにして、フォームの中を進む。しかし、なかなか進めない。それでも懸命に前に出る。額に汗がにじみ出す。寒いのか暑いのかわからなくなる。そこで、はたと考える。一体、どこ行きの列車なのだろう。なぜ、それに乗らねばならぬのだろう。そもそもなぜ、こんな駅にいるのだろう。まあいい。今さら考えたって仕方がない。再び目を凝らし、前へと進む。フォームの縁によくやくくだりつく。さつきより酔いが激しくなった気がする。思わず足を踏み外しそうになる。何とか懸命にこらえる。大歓声がわき起こる。向こうから列車がするすると近づいてくる。人々の興奮がどつと高まる。大西はフォームからまたも落ちそうになる。列車はなおも近づいてくる。われ先に乗ろうと、人々がフォームの縁へ向かって一斉に動き出す。大西はどうとう足を踏み外す。スローモーションのような落下が、こうして静かに始まる。誰かが舌を出して叫ぶ。落ちちゃだめよ。あんたのせいだ。列車が止まっちゃうでしょ。迷惑かけないでよ。また少し落ちた。別の声が聞こえてくる。かなり長い舌である。この恥知らず。こんな時に独り酔っぱらっちゃって。恥を知りなさい、恥を。レールに叩きつけられるまで、あとほんの少しである。別の舌が怒鳴る。こんなところにわざわざ来るからいけないんだよ。ちつとも関係なんかないくせに。レールはひんやりしていて、意外に気持ちいい。大西は眼を閉じる。そして考える。来るんじゃないか。酔うんじゃないか。仕方ない、このまま眠ろう。列車がホームに滑り込んでくる。来る。もうすぐ来る。もうすぐここに来る。フォームからまた手を広げながら、自分に向かって飛んでくる。まるで、羽根でも生えているかのようにである。叫び声があがる。また誰か落ちたみたいだぞ。誰かが答える。違ふ違ふ、あの酔っぱらいを助けようとしてるんだ。仰向

けに寝転がっている大西の体がけ、女はゆっくりゆっくり落下してくる。笑顔である。両手で彼を包み込もうとしているらしい。誰かが大声で叫ぶ。赤の他人のために身を捧げようなんて人が、このご時世にもまだいたか。誰かが答える。奇跡ですよ、奇跡。彼女の体が大西の体に重なる。No.9、No.9、No.9。胸と胸、腹と腹、そして腿と腿がびたりと重なる。No.9、No.9、No.9。彼女が裸であることを、大西は当然のごとく受けとめる。なぜなら彼も裸だからである。彼女の手が彼を包む。No.9、No.9。電流が彼の体を駆け抜ける。彼女の唇が彼の唇に触れる。はじめはいたって軽く。そして次第に強く。重力のせいだろうか。酔いにまかせ、こっちから舌を伸ばす。相手の舌はどこにも見つからない。ふと物足らなさを感じる。しかしすぐ、これまで経験したこともないような高揚感を感じはじめる。二人は少しずつ浮き上がりはじめる。No.9、No.9、No.9。列車はまもなくここまで来るだろう。果たして助かるだろうか。助からなかったら別に構わない気もする。いや、やはり助かりたい。No.9、No.9、No.9。あとどれだけ浮上できるだろうか。あともう少しなのだが。あともう一歩なのだが。どこかで人を焼く匂いがある。No.9、No.9、No.9。

目覚めると、「セツション」はすでに終了していた。他の男女は、とつくの昔に服を身につけていた。男たちは談笑しいい、女たちは鏡に向かって化粧を直していた。一体、どれが流々なのだろう。大西は目をこすりこすり、黒い女以外の四人を比較検討してみようとした。しかし、眠り薬が後を引いているらしく、両眼の焦点がなかなかうまく定まらない。一人また一人と、会員たちが退室していく。誰が誰やらわからないまま、最も遅く寺を後にしたのは、結局、大西であった。

流々の姿を初めて認識したのは、寺から帰るバスの中だったはずだ。混雑する車内の真ん中あたりに、彼女は独りぼつんと立っていたんだ。

その姿を見かけた途端、この人だ、と直観したんだ。彼女は一体、どんな格好をしていたのだろう。どんな顔つきをしていたのだろう。ちくしよう、服装すら思い出せやしない。こんなにも思い出したいのに。なぜだ。どうしてだ。思い出せ。思い出さなんだ。この馬鹿野郎。

なぜふいに、それが彼女だとわかったのだろう。どうして急に、あんな直観が働いたのだろう。彼女の香りのせいだろうか。それとも仕草のせいだろうか。それとも表情のせいだろうか。わからない。思い出せない。ただ、なぜだか急に、自分の直観を無性に信じてみたくなっただんだ。だからこそ、彼女の隣へあんな風に思い切って近づいてきたんだ。こう話しかけてみたはずだ。「先ほど、『セツシヨ』に参加してらっしゃいませんでしたか」。そうだ、そこから全ては始まったんだ。

ああ、もつと思ひ出したい。それなのに、浮かんでくることといったら、またはやコスモのことばかりだ。あの喫茶店での会話の記憶だ。一体どうしてだ。自分でも齒がゆいばかりだ。この世で最も当てにならないもの、それはこの自分自身だ。

「処罰」の話をはたと通り話し終えると、コスモはテーブルの上に数十枚の紙をばさりと置いた。どの紙にも、大西の書いたメールの文面がきれいに印刷されている。

「Oさんは詩人でらっしゃるそうですね」

大西が書いた嘘を、コスモはどうやらまともに信じているようだった。詩だけで食っていくことがどれほど非現実的なことか、全く気にも留めていない様子である。それをいぶかしく思う一方で、大西の両眼は半ば宙を舞っていた。なぜ自分の職業を「詩人」などと書いたのだろうか——職業については一言も触れずにおいたはずではなかったか——眠気は頂点に達しつつあった。

「奇遇でございませぬ。実は私も以前、よく詩を書いておりました。今はもう、止めておりますが」

その瞬間、コスモの黒幕のごとき体の上に、何やら映像らしきものが映し出されはじめた。そんなわけがない、これは幻覚だ、といくら大西が自分に言い聞かせても、それはどうしようもないくらいにリアルな映像であった。

まるでマグリッドの絵のようだ。大西は心の中でつぶやいた。

それは彼の大好きな絵であった。シルクハットの男が一人、闇を背景にしながら立っている。だが、その男にはまるで実体がない。あるのはただ、彼の輪郭のみである。顔の中には、三日月と星が映っている。首から胴にかけて映っているのは、森の中に立つ一軒の古い屋敷である。時刻は夜らしく、大きな窓からは明かりが漏れている。たったそれだけの絵である。たしか、「幸福な寄進者」という題であった。

あの絵の男にまるでそっくりじゃないか。そう思うや、大西の心はまたどこかへとさらわれていった。

遠くの方で、コスモのささやく声がする。まるで、やまびこのような声である。

「Oさんはいったい、どんな詩をお書きになつてらっしゃるんですか」

放送局に入る以前、彼は「大西宇宙」というペンネームで詩を書き続けていた。いま眼の前に映っているのは、まさにその頃の自分であった。背景はどうやら、当時住んでいた古い賃貸住宅の一室である。時刻はどうやら、真夜中近くらしかった。

大西が机にかがみこむようにして、独り詩作に耽っている。そのちょうど真後ろに、女性らしき姿がほの見えている。彼が書いていたのは、「私」という題の詩であった。

私

「この世の全てが私に對して、勝手に名前を与えてやるのよ」
怒った「私」は脈絡もなく、いきなり「する」と「たわし」になった

たわしのわたしは いわしとくらし
わらしをかわかし きらしきたらし
かかしをわらし わがしをさがし
ただしはなしを はだしとくわし

「よく分からぬ」と絶叫しながら、みんなが私を壊してきたので、
怒った「私」は脈絡もなく、単なる音の羅列となった

わたしわたし わただしたわし
わたわたし わたわしたた
たわたわたし わわたわし
わたわたし しわたたた

WATASHI と呼ばれつきた「私」だが、文字順の規則に衝向かうように

だんだん "Am, a shii!" と姿勢し
続いっ "I wash a T!" と姿勢した

そんな必死の意味づけにも飽くと、「私」はふいにどこかへ消えた
WUTUHUUSU IYUUNOを残したまま

名前なき「私」の本性とは何だ

言葉を信じぬくせに、な母、「私」は語る
こんな詩をこんな風に空々しくまとめて
こんな具合に他人に見せようとしてやる

「私」とはいつたい何者なのだ？
(そして私は何者なのだ?)

いつか必ずあの「私」めを、光の中に引きずり出さう
それが私の最後となっても、勇氣を持ってやり抜くとしてよう

後ろの女性は、どうやら全裸らしかった。

遠くの方で、幼い子供の泣き声がする。

あいつだろうか、と大西は自分に問いかけた。

どうやらそれは、彼の前妻らしかった。

ちようど大西が放送局に就職しようとしていた頃の映像である。

学生結婚してから、二年近くが過ぎた頃である。

彼女が亡くなったのは、それからおよそ一年後のことである。

映像の中で、前妻は何やら叫んでいるらしかった。

しかし、大西にはうまく聞き取れなかった。

映像はここでかき消えた。コスモが少し姿勢を変えたからである。しかし、それも束の間だった。すぐさま、別の映像が立ち現れはじめたのである。

そこには再び、前妻の姿が映し出されていた。今度はどうやら、出産して少し経った頃の彼女らしかった。

彼女と大西は、都内の某大学に通う同級生であった。二人はたまたま同じサークルに所属していた。大学内で唯一の詩のサークルである。各メンバーの詩を集め、『超絶』という月刊誌を発行するのが、そのサークルの主な活動となっていた。

大西は国際政治学専攻、彼女は外国文学専攻であった。当時の大西は、

冷戦構造や国連の活動にかなりの興味を持っていた。国際社会における日本の役割やジャーナリズムについても、わりと関心を持っている方だった。一方、彼女は、アフリカ系アメリカ人作家の作品を毎日こつこつ読み続けていた。ゾラ・ノール・ハーストンの、ジーン・トゥーマーだの、リチャード・ライトだの、ラルフ・エリクソンだの、ジェイムズ・ボールドウィンだの、トニ・モリスンだの、大西の知らない作家たちの名前を彼女は時おり口にした。「アイデンティティを失うって、一体どんな気分かしら」「やつと自由を勝ち取ったって思う時の気分って、一体どんなものかしら」「初めて味わう自由って、一体どんな味だったのかしら」・・・作品を一つ読み終えるたび、彼女は同じ疑問を何度も自問自答していた。

バブル全盛の世に押しつぶされるがごとく、サークルの会員数はみるみるうちに減少していった。そしてとうとう、彼女と大西の二人を残すのみとなった。それでも二人は『超絶』を終わらせまいと懸命に努力した。

全盛期に比べると、たしかにページ数は薄くなった。身銭を切るしかない都合上、発行できる部数も以前に比べてかなり少なくなった。それでも二人は、必死になって詩を作った。ほとんど毎日顔を合わせては、互いの作品を批評しあっていた。二人とも、詩のためならば留年さえ辞さないほどの意気込みであった。そして実際、二人はそろって留年した。『超絶』はその間も、途切れることなく続いていった。

「一度でいいから発狂してみたい」「矛盾を恐れない人になってみたい」というのが、当時の彼女の口癖であった。それなくしては、真の詩など絶対に創造しえない、そう固く信じている様子であった。ドンキホーテやヴァージニア・ウルフ、あるいは高村智恵子のように生きることこそ、彼女の理想であるらしかった。

二人はいつの間にか、お互いのことを詩にうたうようになっていった。そして、そのままごく自然に、二人は体まで重ねるようになっていった。

かくして、同棲生活が始まった。事情に気づいた親たちは、二人の決断にござって反対した。それを無理やり押し切る形で、二人は学生結婚したのである。

子供を産んでからというものの、彼女はもっぱら短歌に熱中しがちであった。コスモの体に映る彼女も、今か何か詠もうとしてるところらしかかった。背景は産婦人科のベッドである。生まれたばかりのわが子を、彼女はしっかりその手に抱きかかえている。病室の窓からは、夏色に染まる外の景色が一望できる。

子宮より出でて間もなき児の肌に蟬の声しむ閑かなる朝

吾子はいま詩神となりて理に溺れきし我が子を空蟬とせむ

弱弱強弱強と韻刻む吾子の鼓動に陽のさしかかる

吾子の眼は黒き海なりその底に微動だにせぬ古代魚の見ゆ

暖流にたゆたふ海の藻のごとく指を開きて吾子は眼覚めぬ

コスモが体を少しずつ動かしている。それにあわせて、体に映る映像の内容もゆっくりと移り変わっていく。風の流れに身を任す、「カオスマン」のごとき動きである。

白い病室が立ち消え、再び賃貸住宅の小さな居間となる。大西の姿は、やはりどこにもない。いるのは彼女と子供だけである。彼女は立ったまま、わが子を両腕に抱きかかえている。子供はぐっすり眠っている様子である。その寝顔を、彼女はじつとのぞき込む。そして時おり、にっこりと微笑む。どうやら昨晚、子供は激しく夜泣きしたらしい。彼女がまた詠みはじめる。

哭へ女子に抱かれしつらさへはらひて青き十個の香々たるお
哭をせよと女子に敵意をいだへわなけりよむ伏して俾辱してて去り
哭をせよと女子の眼を軸として無音の田の間に居る
与波の記憶を蟬の抜け殻のつらへ打ち捨てて女子をた眼を
また少し夏の青空暮るるたる女子のせむたのまた少し閉し

続いて映し出されたのは、子供の布おむつを洗面所で、こしこしと洗う、
彼女の広い背中である。それとともに浮かび上がってきたのは、子供と
ともに湯船につかる彼女の裸の上半身である。白い湯気の立ちのぼる中、
子供に向かって何かを口ずさんでいるらしい。

砂金にも似たる我が子の養尿を掴めるわねをわねと風
女子を抱き風呂に寝かれば浴槽の湯は羊水のつらへをせよと
この指を離せばいとも安々と逝くいのちなり湯の中の女子
椰子の実「を咽へば女子は湯の底でわが胸になほ足からめけり
なみだ滴れ我執も滴れし女子の眼はふいに虚空のなを射抜けり

場面がまた変わる。生まれたばかりのわが子を抱きつつ、彼女がどこ
かの花園を散歩している。歩きながら、自分自身に何やら厳しく問いな
けている。とうとう人の親になつてしまった。わたしは本当に、親にな
れるほどの人間だろうか。わたしみたいなものに、この子の心がちゃん
と読めるだろうか。こんな薄汚れた心のわたしに。つぶやきながら、子
供をぎゅっと抱きしめたりしている。小雨がしとしと降りはじめ。子
供の体温が暖炉の火のように彼女の体を温める。すると再び、彼女の口
から、数首の短歌がほとばしり出る。

摘みとりしバシルの花の香をかきけは女子の口より哭めかたへは
羽根をたれ風にしたしつらさへはらしての聲に泣いて女子をた哭けり
曖昧を隠す術なき女子に幸へと浴して術する術
いまた血の乾かぬおのが子の胸にわが器問ふ梅雨明けの午後
濱し手を照らす古井の火は今も女子にたふさ名の劇場に燃ゆ

ここでまたもや、映像が変化する。今度は、誰かの葬儀の様子である。
どうやら寺のようである。弔問客たちが山門をくぐり抜け、次々に境
内へと入っていく。映像は弔問客の横をすり抜けると、まるでドリーシ
ョットするテレビカメラのように、境内へするすると進入していく。そ
して、中央に建つ仏殿へ向かつて、そのままゆっくりと近づいていく。
仏殿の中央には、本尊が安置してある。仏はおだやかな顔で、蓮の花の
上に結跏趺坐している。頭の上にちよこんと乗っているのは、凶暴そう
な獅子の顔である。天井には、「身心凝然」「事事無礙」と大書された巨
大な額が二つ掛けてある。

カメラはそのまま、来た道を戻つて外に出る。そしていきなり、仏殿
の上をふわりと飛び越す。ほんの一瞬、寺の全景が俯瞰される。どこの
寺なのか、全くわからない。再び地上に降り立つと、カメラは仏殿裏の
森の中へとなめらかに入り込んでいく。なだらかな傾斜の参道が、山頂
まで延々続いている。登っていくのは弔問客の長い列である。全員、終
始無言である。道幅はわりと細い。無数の赤い鳥居が、まるでドミノの
ごとく、参道を覆い尽くしている。まさに真っ赤なトンネルである。そ
の中を、弔問客が蟻の行列のごとく歩んでいく。カメラがその黒い背中
を、どんどんと追い越していく。

誰の葬儀だろう。さらに先を急ぐ。ようやく頂上につく。どうやら葬

儀場らしい。棺が二つ、中央に置かれている。一つはわりと大きく、もう一つはかなり小さい。二つの棺の上に、巨大なカラー写真が一つ飾られている。前妻の写真である。笑顔ですくくと立っている。手におさな子を抱いている。カメラが少しずつ旋回する。

弔問客たちの声が聞こえてくる。うわさ話に花を咲かせているらしい。一人が言う。

「まことお気の毒ですなあ。あんな亡くなり方をされるとは」
別の一人が答える。

「そうですね。あんな小さなお子さんまで一緒に亡くされるとは、ご主人もさぞかし落胆なさっていることでしょうなあ」
別の一人が口をはさむ。

「子供さんが階段から落ちそうになつてのを助けようとして、結局、ご自身も一緒になつて落ちちゃった。奥さんは即死ではなかったものの、その時の大げが元で、お子さん同様やつぱりお亡くなりになつた。たしか、そういうことでしたよね。いやあ、誠にやるせない話ですなあ。全くもつてやるせない」

別の一人が声高に話に加わってくる。

「あら、聞いたところによると、どうもそうじゃないらしいですよ。もしかすると、覚悟の自殺だったかも知れないという話ですよ」

「そんな馬鹿な」「亡くなった仏さまに失礼じゃないか」という声に混じつて、別の一人のささやく声が聞こえてくる。

「その噂、わたしも耳にしましたよ。ご主人の暴力、かなりひどかつたんです。もう死にたいとか、このまま舌を噛みきつて死んでしまいたいとか、陰でよくおっしゃつてたそうです。おまけにどうやら、子供さんまでかなり暴力をふるわれてたそうです。あんな男の元に子供を残したんじゃない、死んでも死にきれない。そうお思いになつたんじゃないですかねえ」

別の一人がすかさず反応する。

「ということは、もしかすると、あのご主人が突き落とされたのかな」

「いや、私はやつぱり、覚悟の自殺だったと思いますね」
ささやく声の弔問客がさらに声を潜めろ。

「ご主人の才能に昔からかなり嫉妬してらっしゃつた、っていう話も聞きました。たしか奥さんは詩人志望。ご主人もたしか詩人志望。ほら、芸術家同士のカップルによくあるパターンですよ。嫉妬が高じて最近じゃあ、奥さん、神経までやられちゃつてたそうですよ。おかげで見境がなくなつて、とうとう子供まで道連れに、っていうことだったんじゃないかなあ」

すると新たに、別の一人が違うことを言い出す。

「家庭内暴力にしろ神経衰弱にしろ、あたしは違うと思うなあ。きつとセックスストレスが原因よ。あのご主人、きつと浮気してるのよ。たぶん奥さん、それに気づいてキレちゃつたんじゃないかな。真面目な人だったみたいだし、きつと耐えられなかつたのよ」

「僕が聞いた話とは、かなり違うなあ」

別の弔問客が口を出してくる。煙草を口にくわえたままである。

「警察は奥さんが子供を殺したと見るようですよ。元々、子供が嫌いな人だったそうですしね。出産直後は考えも少し変わったようですが、子供が言葉を話しはじめるようになると、途端にまた煙たたく思うようになったそうです。理由はよくわかりませんが、とにかく、そういうことらしいですよ。ご主人の他に愛人がいた、という話も聞いたな。その愛人、今もつてどうやら行方不明らしいんです。そいつと一緒に行方をくらまそうとして、何かの拍子で階段から落ちた。これが僕の聞いた話の全貌ですよ」

ささやく声の弔問客がこれに反応してくる。

「そのとき、子供も連れていこうとしてたわけだろ。で、一緒に階段

から落ちたわけだろ。それじゃあ何かい、まさかあの子は愛人との間の子供だった、ってことかい」

くわえ煙草の弔問客がさかさず答える。

「もしかするとそうかも知れませんが。ただし、そこまでくると、さすがにわかりかねますね。とにかく、不運な女性ですよ。あんな風に落ちてさえないなければよかったのに。事故の後、奥さんの方はしばらく植物人間状態でしたよね。首に穴を開けられて、そこに呼吸器のチューブを装着されてたんでしょ。どうして急に、その呼吸器が止まっちゃったんですかね」

「それについてはね、いまだに原因不明なんだそうですよ」

自分は一体どこにいるのだろうか。カメラを通じて、周囲をくまなく探してみることにする。だが、いつまでたっても見つけ出すことができない。

一方、カメラは別の事実を発見する。何と弔問客全員が、大西と全く同じ顔をしているのである。

では一体、本当の自分はどこにいるのか。そうだ、きつとこの真後ろにいるに違いない。カメラをいま操っている者こそ、正真正銘の自分なのだ。真後ろを映すべく、カメラがぐるぐる、ぐるぐる、と周りはじめめる。だが、なかなかとらえられない。ぐるぐる、ぐるぐる、と空しく周り続けるカメラ。それに合わせて深まっていく、大西自身の眩暈。

ここにいるはずだ。ここにいるはずなのに、なぜ見えないのだ。

『超絶』の廃刊が決まったのは、大西が就職してしばらく後であった。彼が番組制作の仕事で、彼女が子育てで、それぞれ忙殺されはじめたからである。引き継ごうとする者など、どこにもいなかった。今の在学生の中で、この雑誌の存在を知っている者など、おそらく一人もいないだろう。

大西は最終号のために、「手紙」と題する詩を書いた。「大西宇宙」から大西本人に向けてのはなむけの言葉、という形式の即興詩である。彼はそれを、一生のパートナーたる妻に捧げることにした。作品は、最終号の最終ページにひっそりと掲載された。

「手紙」

親愛なるOさんへ

以下の作品は 私の最後の詩です いつものように あなたの言葉に
まぐ翻訳してもらえれば幸いです たいへん申し訳ありませんが これ
以上あなたと交信することができなくなりました もう行かねばなりま
せん 行き先をお尋ねにはならないで下さい 翻訳がたとえ出版される
運びになっても 私に伝えて頂く必要はもはやありません じつは詩
を長きにわたって気に入っていた下書き 本当にどうもありがとうございます
いや 私を気にかける人など この世に 誰一人いないというのに
いや 一人だけおりました 私の配偶者です 正しく言うなら 私の元
配偶者です

私の作品があなたの手で翻訳され 出版されることだけでもなれば それ
は私にとって 最初で最後の詩集となるでしょう この一年 あなたは
私の作品の翻訳のみで ひたすら心血を注いでくれました 本当に申
し訳なく思っています あなたの地で私の詩集が読まれたことは 今でも
も信じていることができません どの世にも 誰も読まないのですから
うしてそんな自信をお持ちなのですか そういえばお声をなぐされた
とも伺いました 以前から声のない人生を望んでらっしゃったけれど
またたくまに覺えておられます それにしても 何れも幸せらしいのでござい

えているのはコスモその人ではなく、どうやら窓に映る影らしい。ちよつと待て。コスモはさつきまで眼の前に座っていたはずだ。おまけにここは喫茶店の中だったはずだ。なぜ、こんな屋敷の前に立っているのだろう。わからない。だが、気分は冴え冴えとしている。なじみの場所にちよつと戻ったような感覚である。

屋敷の前に立ったまま、大西は焦点の合わない眼で闇を見まわし、夜空を仰いだ。

何者かが森と闇を、天と地を、ぐるりと取り囲んでいるようである。どうやらそれは、コスモの体の輪郭らしかった。

巨大なコスモの中に、大西はぼつんと佇んでいたのである。

さつき自分は眠ってしまったのだ。さつきの葉は眠り葉だったのだ。結局うまくだまされたんだ。やはり、こんな奴に会うんじゃないかったんだ。

コスモの影が窓越しに尋ねかけてくる。

「ご出身は広島だそうですね。ヒロシマ、ですか。どんなところですか。ちよつと聞かせて下さいませんか」

またも新たな映像が、大西の前に立ち上がりはじめる。

前妻が大西の故郷を初めて訪れようとしている。初めて二人だけで『超絶』を発行しようとしていた頃の映像である。季節は夏である。

彼女の体をまだちゃんと知らなかった頃だ——かすみゆく記憶を引き戻さんと、そつと自分につぶやいてみる。けれどももはや、声にさええない。

『超絶』完成を目前に控えたある日のことである。彼女が急に、「作品数が足りない」と主張しはじめた。一方、大西はその出来映えにわりと満足していた。

「これで完成つてことで、いいじゃないか。早く終わらせて、二人でどこか旅にでも出よう」

彼女は頑として譲らなかった。

「あと一つ足りないのよ。あともう一步なのよ」

ところが、大西が「広島に行く気はないか」と水を向けるや、彼女の態度はたちどころにやわらいだ。

「どうして広島ならよくて、他の場所ならだめなんだい」

「あえて言うなら、インスピレーションの問題ね」

「ごちの親に会つてみたいと思つてるんだつたら、先にそう話しておくけど、どうする」

「別に会いたくなんかなし、そんな理由で行きたいわけじゃないの」

広島に着いた翌日、二人は原爆資料館へと出向いた。彼女のたつての希望だったからである。原爆についての詩でも書こうとしていたのかもしれない。その詩を最後に入れ込んで、『超絶』を完成させようという心づもりだったのかもしれない。大西は勝手にそう予想していた。

資料館は彼にとつて、少年時代の思い出の場所の一つであった。中学生の頃も、高校生の頃も、そこは彼の通学路だった。ふらりと入館しては、ここでよく時を過ごしたものだ。どの写真も、どの遺品も、どの蠟人形も、彼にはなじみ深いものばかりであった。懐かしさを抱きつづ、大西は館内をうろつきはじめた。

しばらく観覧するうちに、忘れていた感情が久しぶりに思い出されてきた。一言で言うならば、それは怒りの念であった。やけどを負った被爆者の写真が、ケロイドの切片の一つ一つが、八時十五分で止まったままの腕時計が、眠っていたはずの彼の義憤を次々にあおりたてていく。黒こげの母親にすがりつくおさな子の絵がある。その前ではしばし立ちすくむ。「戦争は悲しい」という言葉が思わず口をついて出る。「二度と繰り返してはならない悲劇だ」という科白までが頭の中を巡りはじめる。たつたそれだけの科白が、妙な安心感を与えてくれるから不思議である。怒りは自分自身の無力さに対しても向けられていく。どんな言葉をも

つてしても、どんな感性をもつてしても、この阿鼻叫喚を的確に伝えることはほぼ不可能に近いだろう。たとえ全事実の何億分の一であろうと、まず間違いなく無理であろう。そう思うだけで、これまで学んできたことの全てが、何だかはかなく見えてくる。「伝えられなくて当然」といくら自分に言い聞かせたところで、その腹立たしさに変わりはない。かように悲惨な光景を、実体験なしに自らの言葉と感覚のみで表現できる人物。それは一体、どんな人物なのだろう。『黒い雨』を書いた井伏鱒二などが、その代表例ということになるのであろうか。いや待て。ケロイドの痛みを実際に知らないのなら、一生涯、この惨事に関しては口を閉ざすべきなのではなかろうか。この異常な現実には、やはり被害に遭った当事者にしか表し切れないのではなかろうか。異常な現実には、まず直面しつつ、その異常性をもはや異常だとは感じられなくなった人、単なる日常として当然視できるようになってしまった人、そんな人しか語れない事柄なのではなかろうか。そうでない人は、たとえ巧みな表現者であろうとも、みだりに触れてはならないのではなかろうか。それでもあえて表現しようとするのなら、巧みな表現者でない方が逆がいいのかもしれない。見るにたえない撮り方、描き方、話し方が、よほど見るにたえるのかもしれない。この現実を巧く切り取ってしまうことは、むしろかすると逆に重罪なのかもしれない。

それにしても、黒く焼けたされたこの人たちは、写真を撮られている間、一体どんなことを考えていたのだろうか。「こんな国になんか生まれてこなければよかった」と嘆いていたのだろうか。「これもお国のためだ、仕方ない」とも思ったりしていたのだろうか。どのくらいの痛みだったのだろうか。どのくらいの飢えと乾きだったのだろうか。一瞬にして肉体をなくした魂は、消滅するその瞬間、一体どんなことを思ったのだろうか。苦ししいと思ったのだろうか。それともむしろ、苦しまずに死ぬることを幸福に思ったのだろうか。わからない。全くわからない。全く言葉にならない。わかるためには、少なくとも言葉にするためには、

一体どのくらいの想像力が必要なのだろうか。

いや待て。そもそも想像力なんてものを、自分は持ち合わせているのだろうか。想像力を鍛錬する時間など、これまでついぞ持たずにきたものではあるまいか。今まで書いた詩の中で、真の想像力から生み出されたものが、一体どれほどあっただろうか。おそらく皆無だったのではあるまいか。それを棚上げにしておいて、原爆の意味を自分なりに巧く言葉で理解しようとあくせくしているんだから、おまえて奴は本当に馬鹿だ。そう考えるだけで、また怒りが込み上げてくる。

そのくせ彼の顔つきは、どこか涼やかで穏やかだった。

まあいいじゃないか。そう深刻に考えるな。被爆者は被爆者。他人は他人。自分は自分だ。これは昭和二十年のお話だ。今はバブルの世の中だ。書けないものを書く必要なんて全くない。書けるものだけ書いていればいいんだ。詩にできるものだけ詩にしていけばいいんだ。ここへ来ることは一種の文化体験なんだ。それ以上でも以下でもないんだ。外国旅行のバックツアーで、その国の歴史資料館を見て回ったりすると、ほとんど大差ないことなんだ。ただの体験ツアーだ。よくあるレジャーの一つだ。ここにたまたま生まれ育ったからというだけで、街の哀しい歴史と自分の詩の世界とを無理やり結びつける必要なんて、どこにもありはしないんだ。それに大体、原爆のことを頑張っただけで、どこにもくらいいなら、もつと実のある平和活動にでも従事していた方がよっぽどましだ。原爆はすでに語られ過ぎたんだ。もはや言葉の時代ではないんだ。行動の時ははずだ。大した行動ができないのなら、ちまちま好きな詩だけ書いて、あとはどこかで大人しくしているがいい。

広島にまだ住んでいた頃、大西は時おり、原爆に関する文学作品を手にとつて読んでみることがあった。なかでも大西の心を深くとらえて離さなかったのは、自らも被爆した作家・原民喜の作品集であった。彼が

特に好きだったのは、原の「鎮魂歌」という短編であった。資料館の出口へと近づきながら、大西はふと、その中の一場面を思い出していた。

終戦直後のある日、被爆者の主人公「僕」は独りきりで「原子爆弾記念館」を訪れる。館内の案内人に導かれ、「僕」はガラス張りの大きな「函」の中へと入っていく。そこにはなぜか、「眼鏡と聴音器の連結された奇妙なマスク」なるものが用意されている。「僕」はそれを頭からかぶせられる。案内人がおもむろにスイッチをひねる。機械が動き出す。次第に「僕」はうろたえはじめる。

突然、原爆直前の広島市の全景が見えてきた。……突然、すべてが実際の現象として僕に迫ってきた。これはもう函の中に存在する出来事ではなさそうだった。僕は青ざめる。飛行機はもう来ていた。見えている。雲のなかにかすかな爆音がする。僕は僕を探す。僕はいた。僕はあの家のあそこだ……。あのときと同じように僕はいた。僕の眼は街の中の、屋根の下、路の上の、あらゆる人々の、あの時の位置をぐるぐる走り廻る。僕は叫ぶ。(厭らしい装置だ。あらゆる空間的的角度からあらゆる空間現象を透視し、あらゆる時間的強度であらゆる時間の進行を展開する呪わんき装置だ。恥ずんき詭計だ。何のために、何のために、僕にそれをもう一度叩きつけようとするのだ！)

この主人公に言わせれば、この資料館も、やはり「厭らしい装置」ということになるのだろうか。

大西はもう一度、見終わった一連の展示品をぐるっと眺め回してみた。しかし、「厭らしい」などとはとても思えなかった。どれも見慣れた展示品ばかりである。変形したガラス瓶。溶けきった瓦。焼けこげた衣服。

抜け落ちた頭髮。真っ黒な爪。そして――摘出されて幾年月もが経過している、黒い斑点だらけの舌の塊。被爆者の体から出てきたガラスのかけら。きのこ雲の写真の数々。原爆について知ろうとするなら、全て必見の品ばかりである。この場所を「厭らしい装置」と言い切るような教育は、ただの一度も受けたことがなかった。「厭らしい」。どう考えても、ここには不似合いの言葉である。

ならばどうして、そんな言葉が急に心をよぎったのだろう。

彼女の姿がすつと視界に入ってきた。

展示品を見下ろしたまま、凍りついたかのように立ちつくしている。魂を抜き取られたかのような顔つきである。

一体、何を見ているのだろうか。

大西は静かに近寄った。その靴音に、彼女がようやく顔を上げる。どうやら観覧者は、彼らだけのようである。

彼女が見ていたのは、石の上につつすらと残る人の影であった。原爆投下の際、誰かがそこに座っていたのである。爆発の瞬間、座っていた肉体はどこかへ吹き飛び、影だけがこうして残されたのである。

「すこいよね。実体が消えて、影だけが残るなんて。無惨極まりないな」

彼女が静かに答える。

「この影、きれいな。美しい。わたし、この影の持ち主がうらやましい」

「『美しい』っていう表現は、ちよつとどうかと思うな。被爆者が聞いたら、きつと頭にくると思うよ」

彼女が再び影に魅入る。芸術品を見つめるかのような眼つきである。

「わたし、もっと早く生まれてればよかった。昭和二十年の八月六日、この広島で、そしてこの眼で、あの原爆の光をちゃんと見ておきたかった」

「おいおい、声が大きいよ」

観光客の一人がやがや入館してくるのに気づいて、大西は彼女の袖を引く張った。

「そしたらわたしの影も、こんな風に永遠に残ってたかもしれない。肉体の方は、光の記憶だけを胸に、向こう側へずると消えちゃったかもしれない」

彼女の声に気づいたのか、観光客の一人が大西に向かって眉をひそめている。

「本当のわたしなんか、すぐに忘れ去られてしまう。覚えてくれる人がたとえいたにせよ、その人だって、やがては向こう側の住人になってしまう。でも、影が消えずにいてくれるのなら。影のまま、こうしてこの世に残り続けることができるとしたなら」

大西は彼女を抱きかかえるようにして、足早に資料館を後にした。彼女はどの抵抗も示さなかった。

真夜中を過ぎた頃、彼女が耳元でささやいた。

「もう一回だけ、原爆ドームを見てみたい」

広島を去るちようど前日のことである。大西は灯りをつけると、眠たい眼をこすりながらベッドから起きあがった。

「こんな時間にかい。止めとこうよ。もう寝よう。もう何度も見たじゃないか」

しかし、彼女はこだわった。

「見に行かないと、眠れそうにないの」

ベッドの脇に睡眠薬の小瓶が一つ、空のまま転がっている。彼女が常用していた、黄色い丸薬である。

二人は再び服を着た。ドアを開けると、他の部屋はすでに寝静まっている様子だった。できるだけ音を立てないようにしながら、ホテルの廊下を歩く。夜の街は、いたってひっそりしていた。

平和記念公園を通り抜け、ドームへ向かうその途中に、一本のアオギリの木が立っていた。あの日、どうやらその木も被爆したらしかった。おかげで幹がえぐれている。だが、葉はちゃんと茂っていた。まだ生きているらしい。

その近くで、一組の男女が激しいキスを交わっていた。スカートをたくし上げようと企む男の手と、それを必死で妨げようとする女の手が、月明かりの中ではつきり見える。大西はふいに、隣にいる彼女の体を抱きしめたくて仕方なくなつた。彼女も立ち止まったまま、眼を細めて彼女の動きを見つめていた。

「この公園、変わってるね」

彼女の言葉を、大西は自分なりに解釈した。

「たしかに。昼間は原爆や戦争を悼む人でいつもごった返すついでに、深夜になるとあんな連中ばかり来るんだからな。これじゃまるで、性欲処理場だよ」

女の太ももが次第にあらわになつてくる。男がネクタイをゆるめる。

女が何かつぶやく。男が女の首筋を吸いはじめ。

「そんなこと、別にわたしはどうだって構わないの。聖なるものとみだらなものと同じところに混ざり合ってるなんて、わたしは逆にすてきだと思ふ。わたしと言ってるのは、そういうことなんかじゃないの。そんなことは別にどうだっていいの」

彼女は公園のはるか彼方を指さした。

「今日の昼間、独りであの辺りを散歩したの。そしたら、公園の外にも碑を一つ見つけたのよ。朝鮮の人たちの碑だった。もちろん、被爆した人たちの碑。他の人たちの碑は公園の中にあるのに、あの人たちの碑は公園の外なんだね。どうしてこちら側ではなく、向こう側に建っているのかしら。変わってるって言ったのはそういう意味。たぶん、いずれは公園内に建て直されるんでしょうけど」

月光の下、男が自分の下半身を丸出しにしはじめる。女がくるりと背を向け、そばに立つ木の幹に手をつく。アオギリがその様子をじっと眺めている。眺めながら、しきりにその葉をざわざわと揺らしている。公園内の「平和の鐘」が、ぼーん、ぼーんと二つ鳴る。女のむき出しの尻が、男に向かってゆつくりと突き出されていく。両者の顔が暗闇に隠れる。月光に照らし出されているのは、もはや交わりあう二人の下半身のみである。彼らの踏みしめている大地の下には、今も無数の人間の灰が積もっているはずである。

「行きましょう」

原爆ドームの方へ向かって、彼女はすたすたと歩き出した。その後を、大西はゆつくりと追った。前を行く彼女の姿を、三日月が静かに照らしはじめる。今夜はことさら、その後ろ姿がなまめかしく見える。犬のようにあえぐ男女の息づかいが、公園の闇を静かに満たしはじめていく。

ドームの周囲には、全く人影が見えなかった。珍しいこともあるものだ。大西は辺りを見渡した。相生橋の上も、市民球場の周囲も、元安川の沿道も、完璧に無人である。車さえ一台も通らない。おかしい。いくら深夜とはいえ、こんなのは変だ。ここは街の中心部のはずだ。どうしても誰もないんだ。

「こんなこと、絶対に口にすべきことじゃないのかもしれない」

彼女がぼつりとつぶやいた。ドームの頂きをじっと見上げている。つられて、大西も同じ場所を見上げた。むき出しのアーチ状の鉄筋が、痛々しげに月光を浴びている。

「でもね、正直に言うけど、わたし時々、本当の恐怖つてものを味わいたくて、どうにもこうにも仕方なくなるの」

「本当の恐怖って何だい」

「人類の歴史に残るような恐怖。例えば、原爆が投下されたばかりの広島街。ガス室へ送られようとしているアウシュビッツの人々の列。

白人の放った猟犬から逃がれようと、山の中を必死に走り続けている黒人奴隷の家族。そのまっただ中に、自分も当事者として身を置いてみたくなるの。自分はそこで、どんな具合に死と向き合おうとするんだろう。どんな具合に、不条理な運命と向き合おうとするんだろう。どういうわけか、そんなことが知りたくてたまらなくなるの」

話を聞きながら、大西はだんだんといらだちはじめていた。

「わたしたちの暮らして、ほぼ完璧に恐怖から隔離されちゃってるわよね。どの死の恐怖にして、ほつともうまく隠している。だから、死について考える必要なんかほとんどない。真剣に口にする。ことなんてまづない。人の死は、テレビや映画の中の絵巻事になってる。わたしたち、そんな時代に生まれてきてしまったのよ。真の恐怖を知らないから、くだらないことでしか怒れない。あまねく人々に訴えかけるべきメッセージなんか、一つも持ちあわせてない。オリジナリテイなんて全くない。あるのはただ、できあいの言葉ばかり。他人の言葉にただ乗りしてるだけ。おまけに、それを自分の言葉だと思い込んでる。みんな偽善者。あなたもわたしもみんな偽善者。去勢された動物みたいなもの。だから恐怖がほしいの。本物の悲しみや痛みや憎しみにどつぱりとまみれてみたいの。それを乗り越えることで、自分だけにしか出せない心の声を見出してみたいの。とんでもない罪を犯して、死刑判決を受けてみるのもいい。人類史上まれにみるような罪に巻き込まれて、苦しみがきながら生きてみるのもいい。死病の中をさまよってみるのもいい。そうすれば、こんなわたしの中からも魂の言葉が生まれ出てくるかもしれない。わたしたちの魂の詩がほとばしり出てくるかもしれない。借り物でも翻訳でもいい、わたしたちだけの生の詩が」

「ごめん、もう聞きたくない」

大西は顔をゆがめた。殴りつけたい衝動が、一瞬、心の底をよぎる。

「言ってることがむちゃくちゃだよ。戦火の中で苦しんでる人たちが、死病と今なお戦ってる人たちが、犯罪に巻き込まれて愛する者を亡くし

た人たちの気持ちも、少しは考えてみなよ。恐怖や不幸や罪を身をもって経験していなくても、魂の詩は書けると思うけどね。淡々と過ぎていく日常の中にも、啓示の瞬間はちゃんと用意されてるんじゃないかな。

あとは当人が気づくかどうかの問題だよ。被爆者になったただの、原爆の光を見たかったのだ、ここへ来てからというもの、人の道に反した発言ばかりだね。一体どうしちやっつたの。もしかして、原爆投下は正しい行為だった、とでも考えてるの」

「何だかひどく怒らせちゃったみたいだね」

彼女はふいに身を躍らせると、ドームを囲むフェンスに向かってぱつと飛びついた。どうやら、よじ登るつもりらしい。猫か狐でも見るかのようである。

「おい、何してるんだ。やめとけよ。そこは立入禁止だぞ」

大西の制止を振り切ると、彼女は一気にフェンスの向こう側へと飛び降りた。そのまま、ドームの中心へ向かってずんずん歩いていく。

大西は辺りを見回した。闇に包まれた街は、相変わらず無人のままであった。

「ねえ、こつちに来てよ」

瓦礫を踏みしめる彼女の足音がする。なぜかしら、コーヒートの香りが鼻をくすぐりはじめる。どこからか、ピアノの音がしはじめる。乾いたタツチのバツハである。なぜ、コーヒーなのか。なぜ、ピアノなのか。相変わらず、わからないままである。

知らぬ間に、彼女が服を脱いでいる。全裸のまま、廃墟の中に立ちつくしている。その姿が月光に照らし出されている。影が瓦礫の上に、くつきりと伸びている。

「怒ってないなら、飛び越してきてよ」

彼女のまわりを誰かが取り巻いている。間違いない、誰かいる。半ばおびえながら、半ば興奮しながら、大西もフェンスを乗り越える。そし

て、すぐに彼女の方へと歩み寄る。ドームの周囲は、深く静かな闇ばかりである。

「服、脱いで」

言われた通り、全裸となる。思わず彼女を抱きしめる。初めて触れる裸体である。そのままつながってみる。彼が上になり、彼女が下になる。

瓦礫の上に裸のまま寝そべるのはさぞ痛かろうと、できるだけ体重をかけないように気を配る。しかし、彼女は全く平気な様子である。夢とうつつの境をさまよっているらしい。睡眠薬がようやく効いてきたのかもしれない。

こんなことをして誰かに見つかりでもしたら、大変なことになる。街の歴史と尊厳を土足で汚しているようなものだ。間違いない逮捕されるだろう。間違いない、永遠に非難され続けるだろう。

誰かがこつちを見ている。間違いない。気配がする。闇の中に誰かがいる。

声を出そうとする彼女の口を懸命に手のひらで封じながら、周囲の闇へと何度も眼をこらしてみる。さつき見かけた、あの男女であろうか。それとも、この辺に寝泊まりしている浮浪者の一群であろうか。それともまさか、ここで亡くなった人たちの幻影であろうか。

闇の中の人影がふいにあらわになる。男と女である。女はかなり老けているように見える。男はどうやら足を引きずって歩いているようである。女は眼を閉じている。見えないのだろうか。そう思いながら、下に寝そべる彼女の体をなおもしくこままさぐる。そんなばかな。あれはただの幻だ。ここは広島だぞ。神戸なんかじゃないんだ。あの親子のことはもう忘れる。あの番組はとつづく昔に終わったんだ。もう被災地なんかじゃないんだ。広島はもうすっかり復興してるんだ。神戸だってもう復興しはじめてるんだ——神戸？神戸がいつたいたというんだ。ああ、妄想だ。全てはただの妄想だ。いま、自分は一体、いつの時代に

いや待て。本当に妄想だろうか。いる。やっぱり誰かいる。そこにもあそこにも、確かにいる。それも無数にいる。完全に包囲されている。しまった。気がつかなかった。もう手遅れだ。逃げ道などなさそう。声が聞こえてくる。幻聴だといいいのだが。

「よそ者は出ていけ」

「そうじゃ、出ていけ」

「わしらの人生、勝手にいじりくさりやがって」

「もう何にも思い出したくないんです」

「語ってはならん」

「口をきいてはならん」

多くの建物にさえぎられ、間違ひなく見えないはずの瀬戸内海が、ここからでも見事に眺望できるような気がしてくる。全ての障害物が、何かの拍子に全て消え去ってしまったような気がしてくる。思わず、裸の上半身をぶるつとふるわせる。電流のごとき感覚である。手から力がふつと抜ける。このまま射精しそうである。今度は彼女が上になり、彼が下になる。その瞬間、彼女の口から、憑依したかのような声がほとばしりはじめる。

「まだあるの。あるはずなの。まだ嘆けるはずなの。まだあるの。あるはずなの。いっぱい、いっぱいあるはずなの。みんな鳴り響いてる。ああ鳴ってる。まだ響いてる。だからくつついて。もつともつと。もつとつながって。ああみんなくつつく。みんながくつついてくる。もつともつとくつついて。みんな、わたしとくつついて。みんながわたし。みんなが、わたし。ああ流れてく。みんな流れてく。置いてかないで。わたしも流して。さあ早く流して。お願い、流して。わたしもいくから。すぐにいくから」

無数の人たちの影が、見知らぬ影の断片が、大西の胸の上に、ぼたりぼたりと落ちてくる。彼女の汗かもしれない。いや、それは汗というより、むしろ影であった。あるいは闇の汗であった。

射精の瞬間、思わず天を仰ぎ見る。ドームの天頂に、大きな星がたつた一つ静止している。光を徐々に増幅させているのだろうか。それとも、光をぎゅつと押さえ込んで、ゼロの世界へでも還ろうとしているのだろうか。あの朝、原爆は一体、どんな風に光ったのだろうか。次第に、何か上から舞い降りてくる。それと同時に、自分の体が上へ上へと浮き上がっていくような気さえてくる。

ぼんやり考えているうちに、全ての行為は終わりを告げた。おそらく、避妊しなければならぬはずであった。しかし、そんなことなど、もはやどうでもよくなっていた。

そのまま眼を閉じる。体の上で、彼女の顔がやわらかく上気している。「もしこれで赤ちゃんができれば、わたし、ルルって名前をつけてあげたい。『流れる』が二つで『流々』。もちろん、女の子だったらの話だけ」

彼女が静かに倒れかかってくる。そのまま寝息をたてはじめる。ドームの周囲は、なおも無人のままである。

本当に、こんな過去だったのだろうか。

眼を開けると、再びそこは「さまよへるユダヤ人」の店内であった。

コスモが相変わらず、眼の前に黙って座っている。

グールドの演奏は、そろそろ終わりに近づいていた。コーヒーカップは、すでに二人とも空である。風いているのか、モバイルは静止したままだった。

「お薬の効果がそろそろ切れる頃だと思えますが、ご気分の方はいかがです」

「はあ、別に何ともないみたいです」

「本当に何ともないですか」

「うまく言えないけど、なんかこう、妙な解放感みたいなものがありますね」

「そうですね。解放感ですか」

「そう言うと、コスモは静かに立ち上がった。

「結婚なさったことは一度もない、とお書きでしたが」

「ええ、ずっと独身でました」

「わかりました。ではOさん、よろしければ、次の『セッション』にお越しになってみて下さい」

「つまり、合格、というわけですか」

「ええ、まあ、そんなところですよ」

嘘だ。これはきつと夢だ。

私の人生はこんなものではなかったはずだ。

これはきつと他人の人生だ。

きつと誰かがどこかで、私の人生を勝手に書き換えているんだ。

気がつくと、検索結果はすでに画面上に現れていた。

ヒットした文献は一件のみであった。あまり有名でないせいか、流々がよく投稿していた文芸誌は、この図書館では大して重要視されていない様子だった。

しかし、検索結果は間違いなく、流々の作品らしかった。大西はとりあえず、司書に詳しく尋ねてみることにした。

司書の座るカウンターへと向かいながら、大西は久しぶりに、流々の「恋人」なる男のことを思い出しはじめていた。

彼女の部屋にもついていた頃、大西は毎日、彼の持ち物をわが物顔で借用していた。男の本棚まで、時には勝手に物色した。ヘミングウェイの全集と、開高健のベトナム戦争ものが少々置いてあるだけの本棚であった。

一方、流々の本棚では、エドガー・アラン・ポーの全集と安部公房の

小説群がひときわ目立っていた。安部の『他人の顔』などは、背表紙がえらび擦り切れていた。さぞかし愛読したのだろう。「顔を失った男が、自分のために仮面を作る話よ。いつかわたしも、こんな内容の詩を書いてみたいな」——紙にわざわざそう書いて、見せてくれたことさえある。

『他人の顔』のすぐ隣には、『With One More Step Ahead』と題された洋書が一冊置いてあった。どうやら小説らしかった。作者名は「G. T」となっている。「この作者、実はイニシャルだけしかわかってなくて、あとのことは今なお全く明らかにされないんだけど、作品自体はわりとよく知られてる、すでに世界中のいろんな国の言葉に翻訳されているの——日本語訳だけがまだ出てないんだけど——わたし、外国語といえば英語しかできない、本当に生半可な人間だから、英訳だけに頼ってどうにかこうにか読んで、つてわけ」と、流々がいつだったか教えてくれたことがある。「原作自体がいったい何語で書かれてたかさえ、今では諸説あるくらい作品でね——内容をあえて一言で言うなら、本当の戦争をいまだ知らない一人の男が、本当の戦争を求めて自分の心の中にさまよいこむ話、つて感じかな——日本語訳がまだないんだつたら、わたしが自分で訳してみようかと思ってるのよ」と言いながら、彼女が見せてくれた自らの翻訳原稿の冒頭一行目には、このようにはつきりとタイプされた数週間『後』のことである」。

そして——「恋人」の男の顔写真が一枚、部屋の隅に飾ってあった。片づける気など、流々にはさらさらないようだった。大西は毎日、その写真を眺めて暮らした。まるでその写真が、彼を毎日眺めて暮らしているかのような気分だった。

男はつぎはぎだらけの顔をしていた。どこかでひどいやけどを負ったらしかった。顔面には、いろんな色の皮膚が移植されていた。縫い目の跡が異様に隆起しているせいで、鼻と口の輪郭がもはやわかりにくくなっていた。

舌のない口を固く閉ざしたまま、流々が再び筆談を始める。

「この肌は全部、彼が何とか救おうとして、結局救えなかった人たちの皮膚」

男の顔は全体的に、皮が厚く盛り上がっていた。様々な皮膚が、何枚も重ね縫いしてあるらしかった。

「顔だけじゃない。体全身、足のつま先まで、全て他人の肌だらけ」
三百人以上の人々が、男に皮膚を分け与えてきたのだという。男はいわゆる、戦場ジャーナリストであった。戦争のあるところ、彼は力メラ片手にどこへでも出向いた。

「今もおそろく、どこかの戦場にいるはず」

目前に死にそうな人がいると、男は撮るのを忘れて助けようとするらしかった。おかげで何度も、巻き添えをくらって死にかけたらしい。幼い子供を助けようとして、火の中に飛び込んだことすらある。顔のやけどは、その時のものだった。仕事で評価されたことなど、ほとんどない人間らしかった。

「本当に馬鹿な人。あんなことしなくても、生きていく道はいろいろあるのに」

顔面にやけどを負った時、犠牲者の家族が「死者の皮膚をあなたに提供したい」とわざわざ申し出てきたのだという。「きれいな皮膚がまだ少し残ってる。そこだけはぎ取るから、どうかその顔に張りつけてやってくれないか」と言ってきたのだという。男はその言葉を喜んで受け入れた。一種の供養とでも思っただろう。とにかくそれが、初めての他人の皮膚であった。それからというもの、戦争写真ならではのシャッターチャンスを見逃さず。それからというもの、戦争写真ならではのシャッターチャンスを無駄にしてまで救おうとした人の命が、眼の前で無惨に失われていくのを見るたびに、男は死者の肌からほんの一部をはぎ取って、手持ちの麻酔薬と針とで自分の顔や手足に縫いつけるようになっていったのだという。遺族の承諾を得ることができたのは、最初のやけどの際のみだったらしい。

全て、流々から聞いた話だ。

「実は明日、彼が戻ってくるの。だから、あなたとは今日でおしまいにしたい」

大西は一言、わかったと答えた。それが当然な気がしたからだだった。

「二つほど聞いていいかな」

流々が筆を走らせる。

「何」

「もし仮に、この二週間で妊娠してたとしたら、一体どうする」

流々の筆が止まった。大西がさらに尋ねる。

「墮ろすのか。それとも、ちゃんと産んで、規則通りコスモに預け渡すのか」

「たぶん産む。たぶん誰にも渡さない」

「彼にはどう話すの」

大西がつぎはぎだらけの顔を指さす。

「彼なら大丈夫。自分の子だと思っはす」

「コスモは『処罰』とか言ってたけど」

「そんなことより、もう一つの質問って何」

「どうして、俺とこうなろうと思っんだ」

「じゃあ、あなたはもうどうしてこうなろうと思っただ」

今度は大西が黙り込む。流々が筆を置き、彼の顔をじつと見つめ始める。

大西も彼女の顔をじつと見返す。眼が語り始める。

「もし今、わたしに子供ができてたとしたら、あなたは一体どうする気なの。受けとめるつもりなの。それとも逃げるつもりなの」

流々の子供は、いったい誰の子だったのだろうか。

もしかすると、彼女はコスモに「処罰」されたのかもしれない。

「その雑誌なら、この図書館の最地階です」

でしようか わたしたち二人の元の言語とは 一体何だったのしょうか 先生 どうか教えて下さい あなたは先生なんだから このへらい わかっていたければならないはず

おい / 一体どうなんだよ おまえ 賢いんじゃないのかよ

そうか 答えられないのか / 一度にいろいろ尋ねたら 途端に答えられないんだよ まじりのか この馬鹿野郎 どうしてこれ以外の言語が使えないんだよ この馬鹿野郎 どうしてこんな言語でしゃべり合わないきやいけなんだよ この馬鹿野郎 どうしておまえなんかの患者にならないきやいけなんだよ この馬鹿野郎 どうしておまえなんかに診てもらわなきゃいけないんだよ この馬鹿野郎 おい 何とか言ってみよう

おい 何とか言えよ はっきり言ってみようって言うてんだよ 聞かえねえのか この馬鹿 何なんだ おまえは もっとちゃんと説明してみよう この戯医者

先生 / めんなさい どうか どうかお許して下さい 時々こんな具合に汚い言葉が勝手に飛び出します でも わたしが悪いわけじゃないんです 全部わたしの「原作」のせいなんです わたしは単なる「翻訳」なんです わたしはただ 「原作」を忠実に繰り返しているだけなんです もしかすると先生は 「原作」と「翻訳」を 全への別物としてお考えかもしません 「原作」にならぬものが「翻訳」にあり 「翻訳」にならぬものが「原作」にあると 本気で信じてらっしゃるかもしれません どうですか 違いますか

でも先生 それはあくまで 悪い「翻訳」の場合なんです わたしみたに手並みのいい「翻訳」には そんなわけはない はなから存在して

ないんですよ 夫もよへ その言っておりました 先生 ちゃんと聞いて下さいますか

先生 起きろってしゃいますか 先生 O先生

先生はわたしの夫を「存じましたか たしか「存じ」のはずでしたよね それとも わたしの記憶違いでしたでしょうか

ああ そうですか まあ どうちやあらうか 別にわたしは構いやしません 夫は詩人でいいました 翻訳家でもございしました まだ死んではおりません ちゃんと生きております た体が動かないだけです 全身の筋肉が完全に麻痺しているだけです 動くのはただ 眼球だけなんです けれども ちゃんと話せるんです わたしとならちゃんと話します 眼球を使って話します 話す時の約束事は次の通りです 眼球がぐるぐる一度回したら 「はい」という意味です 眼球が二度ぐるぐる回したら 「はいえ」です 眼のちやうど真ん中で眼球が止まったら 考え込んでいますか 答えに迷っているのかどちらかです これがわたしたち二人の会話スタイルなんです わたしただけにしかわからない話し方なんです

夫は一日中ベッドに寝ております 朝から晩までです 春も夏も秋も冬もです もはや自力では呼吸できないのです ベッドの横には 大きな呼吸器が備えつけてあります 呼吸器をつけただけのは あの事故の直後です 首の真ん中に穴を開けて ユム状のチューブを一本挿入してもらったんです そのチューブと呼吸器がつながっているというわけです 呼吸器が正常に機能しているかどうか たえず確認しつゝ 定期的に流動食を与えるのが 今のわたしの日常なんです

え 誰がそんなことを言ったのですか 違いますか 夫にそんなことを言
きるはずがありません 先生 彼は人殺しな人です いたらない子供を
殺したのです けれども あんな罪を犯してへくれたおかげで こころで
ちややへ わたしの心も戻ってへくれたのです ちややへ わたしの
子供になつてへくれたのです ちややへにも行かなくなりました 見ても
い わたしの体にも こころにも 触れ続けられていります わたし
の手の力を借りながら こころで隅々まで触れてへくれたのです 先生
あなたにだんながいます 先生 お願ひです わたしの顔をぢやんと見
て下さい ぼろ先生 わたしは今 真裸です 何も身につけてはいり
ません 先生 どうか見て下さい 先生 の先生
わたしにはもう 触れもしないのわ

先生 今までは黙って聞いて下さい 本当にありがとうございます
先生のかへれんぼみたいな気がしませんか 先生が隠れて わたしが
鬼 先生がお隠れになるのは 誰か自分を見つけてもらいたいから
違いますか 「はい」ですか 「はい」ですか

「体はこころですか 先生 もうお疲れなんですか それか」先生「の取
るべき態度ですか 少し怠慢ではなからですか それでも本当に」先生「
ですか 本当に責任の取れる人なんですか ああ先生 だんだんあなた
と話すのが 難しくなつてきました わたしのこころが恐いのですか 先
生 わたしには先生が必要なんです それこそ必要ではなからですか
か 誰が必要だと言ひましたが ところが くれからもそんな態度をお
続けなされるなら 先生は残さずか あなたを殺すわになりませ
ん ちややへですか あなたを殺すのは ちややへ ちややへ簡単なんです
「存じて下さいか ちややへのチャンネルを引き抜いただけです すべてあ

あなたの息の根は止まるんです ぼろ ぼろ こんな具合に

先生 わたしはあなたの「翻訳」でいいいます 「原作」はごめい
おります わたしは とても優れた「翻訳」です 自分影が「翻訳」
させん 「翻訳者」がとても優れた人からです 自分の影が「翻訳」
の邪魔になつたりしないよう 事前に自分を消してへくれたのです
「翻訳者」がすうかり不在のおかげで わたしの姿は「らん」の通り
完璧なものとなりました そして「賢」の通り 心ゆくまで狂えてお
ります そして今でも あなたのこころを愛しております 夫は詩人にな
りました 現在 行方せくらましております まるで古代の魚のちやや
だんなに姿を隠しております だんなに行つたか 「存じますか 「は
い」ですか それとも 「はい」ですか

ちややへ存じてはなからでしやう だつてあなたのよう人間に 真の愛
などわかるはずがない 自分の作品の中でしか 強く愛せない人なのだ
から わたしに對するあなたの愛は 吹けば飛ぶような弱者の愛だ
違いますか

先生は 夫が今でもわたしを愛していらるとお考えますか 「はい」です
か

もし先生が自身か 夫の立場にあつたらしたら わたしのことを愛しま
すか 「はい」ですか

何を言へていらしやるのか 今びん聞き取れません 先生 これから
だんなの行方についてお話をしますか わたしの声か聞かれますか くれ
はあつて 宇宙船から完全に閉め出され 独自の宇宙をあなたに続け
ていられる飛行士の 地上の管制塔が空しく寂びかきを繰り返していらるもの

わたくしはわたしも みんなのわたくし

落つてくへんじなななななななな

あなたが「眠りの世界」と呼ぶ場所へ

他の人には見えない世界へ

ああ 一人きりして落ちてくへんじなな

ロズカ ああ ロズカ

お願いです

わたしの顔をちゃんと見て下さい

真の夫婦にならうとはありませんか

たとえそれが いかにはかならいものでもうらやま

わづらひか夫へ わづらひか妻か

わづらひか夫へ わづらひか妻か いらひかきこた来ひなすや

一人はもはち ほとんたの存在なのですから

ああ 幾すてんじななななななな

あらゆる境を越えてくへんじなななな

すばらしい未来を迎えるための世界へ

お互い努力してくへんじなななな

読み終えて、大西は絶句した。

流々の詩が、自分の書いている『あともう一步で』の一部にそっくり
だったからである。

彼は雑誌を元あった位置に戻すと、その場からそそくさと立ち去ろう
とした。

その刹那である。

振り向いた彼の前に、巨大な森が広がっていた。

もうそこは、図書館の中などではなかった。

森の中を、一本の電車が走り抜けていく。

いつの間にか大西は、その乗客の一人となっていた。

電車の目指すその先に、一本の巨木が見えてくる。

ベンガル菩提樹だろうか。

巨木を最後に、どうやら森は終わっているようである。

さらに向こうには、大海原が広がっているようである。

見覚えのある海である。まさかあの果ては、神島だろうか。

そうだ。間違いない。この海の果てに、きつと流々がいる。

電車には、大西以外にも一人だけ客がいる。

どうやら大西の「案内人」役らしい。

原民喜の短編「鎮魂歌」が、再び思い出されてくる。「原子爆弾記念
館」という言葉が心を急によぎっていく。「案内人」の男が右手に持つ

一団が、ずんずん北へと押し流されている。時おり、疾風が午後の海辺を吹き抜けていく。沖合いはけっこう揺れそうである。港の待合室でしばらく船を待つことにする。

定期船は、答志島とその向かいにある菅島の間をずんずんと進んでいく。釣り人らしき中年男性たちや、文庫本を読み耽る下校途中の中学生の姿を横目で見つつ、船内の長椅子に腰かけ、ただぼんやりと船の振動に身を任せる。菅島港で乗客を幾人か下ろすと、船は白いレンガ造りの菅島灯台を右手後方に、答志島の集落を左手後方に残して、伊良子水道をひたすままつしぐらに進む。神島は、そのはるか前方に浮かんでい

るはずである。多くの海女たちを育んできた、周囲四キロほどの伝説の島。その姿を早く見ようと前へ動きかけた矢先、激しい縦揺れが全身を襲う。窓から外を覗くと、真っ白な飛沫を上げて不気味にうねる青黒い海面が一望できる。途端に、すさまじい揺れが再び船を襲う。立っていられなくなり、目の前の長椅子にだらりと寝そべる。大きな振動の合間を縫うようにして、小刻みの揺れが不快に混ざる。

船酔いしはじめた大西の隣で、例の「案内人」がまたも快活そうに独り言を述べたては、しめる。

「ロケ日にも、今日みたいなうまく嵐が来てくれたらなあ。荒れ狂う海なんて、いかにも離島感が出ていいじゃないか。番組本編に入る前の、格好のアクセントになってくれるかもしれない」

固い椅子の表面に何度も頭をぶつけながら、虚ろな目で彼を見返すと、大西は弱々しい声でこう言い返す。

「どうしてそんなに脈絡をつけたがるんだ。一つの脈絡で語りきれものなんか、この世には何一つ存在しないんだぞ」

神島の輪郭が遠方で霞んでいる。船が揺れたたびに、乗客の悲鳴が船内にこだまする。それに負けじと、「案内人」が声を張り上げる。

「どうした。今日は馬鹿に哲学的だな。いいかい、楽しくなけりゃテレビじゃないんだぜ。誰にでも理解しやすく、それでいて面白い筋立てを提示してやる、それがテレビじゃないか。おい、血迷ったのか」

大西は、言い返す言葉をなくして沈黙する。

島に着いた翌朝、彼はいつもより早く起きた。昨日の船酔いの余韻だろうか、少々微熱を感じる。他の部屋の客たちは、どうやらまだ寝ているらしい。

気分を紛らせるべく、外へ出てみることにする。和室のふすまをそつと開け、できるだけ廊下をぎしぎし言わせないようにして歩く。木造の階段を静かに降り、備え付けの下駄を試しに履いてみる。旅館の台所の横を通り抜けようとしたちょうどその時、白い割烹着をまとった中年の女主人とばったり出くわした。

「よく寝られましたか」

「ええ、ぐっすり。奥の六畳部屋が空いてくれて、本当に助かりました」

無理して答える大西に、女主人は屈託のない笑顔で頷き返す。

「お客さん、運がよかったですよ。他の旅館はたぶんどこも満室やっただと思うね」

女主人の背中越し、台所奥の壁いっぱいに、映画『潮騒』の色褪せたポスターが張つてある。三浦友和と山口百恵の若き日の姿が、ここでは妙に場違いに映る。

朝食までに戻ると告げて、狭いコンクリートの路地へ出る。昨日はこの路地を、港の方からずつと上つてきたのだった。このままさらに上つていけば、島の守り神である八代神社を経て、標高二百メートルにも満たない燈明山の頂へと出るはずである。その頂を越え、木立の中を島の反対岸へ向かって左へ降りると、神島灯台の真っ白な姿が見えてくる

のだという。前の晩、旅館の女中からそう聞いたばかりだった。

「それじゃあ、右へ下ると何があるんですか？」

洗面場の排水溝を掃除し終えると、女中は軽く腰を伸ばした。

「お客さんは、映画の『潮騒』を覚えとられるかね。放送局にお勤めなら、たぶんご存知でしょ。あれはこの島で撮影した映画でね。それでお有名になった『観の哨』が、右に降りるとありますわあ」

心がまた少し浮き立ってくる。島をあらかた巡り終えたら、最後にあそこへ行ってみるとしよう。空を見上げると、雲一つない夏の曙の中を、鳶の群れが自在に舞っている。大西は心のおもむくままに、からころ下駄の音を響かせながら、路地をのろのろと下っていった。

港の周辺を、しばらくふらふら徘徊してみる。島の女たちが、洗濯物を足で踏みながら洗っている。海辺に出ると、使用済みらしき大量の蛸壺が岸辺のあちこちに積まれている。何気なく、そのうちの一つをじつと覗き込んでみる。真っ暗な深海の底を間近に見ているような不気味さが、顔いっぱい漂ってくる。どこか懐かしく、なぜか心を酔わせるような不気味さである。壺の前にはしばし佇む。いまだ夢から覚めやらぬ、病み上がりの人のような気分である。

すかさず、「案内人」が近寄ってくる。

「もつと周りをよく見ろ。左手の突堤で何かやってるぞ。今すぐ取材しろ。番組に使えるかもしれないぞ」

そのまま突堤へと近づくと、威勢のいいかけ声が、緩やかな朝の空気を震わせている。取れたての鯛をさばく、仲買人たちの声である。どうやらここは、島の魚市場らしい。

足元にうち寄せる波の音を聞こうと、その場にしゃがみ込もうとする。しかし、「案内人」がそれを許さない。

「仲買人たちの動きをもつとよく見ろ」

仕方なくそちらに目を向けると、彼らと買い手の間で、何やら手の

ひらサイズの木片のようなものがしきりに交換されているのがわかる。互いの言い値を白いチョークで木片に書き込んで、相手に渡している様子である。相手が不服だと言えば、それを手で消して次の値を書き込む。周りで見ている漁師姿の女たちに聞くと、どうやらここではその木片のことを「ふだ」と呼んでいるらしかった。「案内人」が笑いながら、再び声をかけてくる。

「『ふだ』か。この島ならではの風習らしいな。ここはロケすべきポイントだぞ。ここでカメラはこの島一番の鯛釣り名人と出会う——そんな流れはどうだろう。よし、それで行こう。そうと決まれば、あとはセッティングだ。うまい具合に仕込めよ。朝食が済んだら、さっそくその名人とやらを探すんだ」

粘り着くような倦怠感を抱えたまま、海岸沿いをなかも歩いて、港の棧橋近くに立つ漁協の前に出る。島唯一と思しき電話ボックスが、次第に暑くなる陽光に照らされながら、寂しげに立っている。路上の日陰のあちこちに、座り込んで遊ぶ子供たちの姿がある。その一角で、前夜の女中が立ったままジュースを飲んでいる。朝の掃除をようやく終え、下まで飲み物を買いに降りてきたのである。

「案内人」が彼女に近づいていく。

「すみません。またちよつとお尋ねしたいんですけど、この島で一番の鯛釣り名人っていつたら、どなたになりますかね？」

彼女はしばらく考えた末、市場と反対の方向を指さす。

「あの家じゃないかねえ、一番うまいのは」

「案内人」は礼を述べると、漁協の前を急ぎ足で通り過ぎ、教えられた路地の急勾配を独り上っていく。大西が、その後を早足で追いかける。

家の前にたどり着くと、「案内人」と大西はまず、中をそつと覗いてみることにした。いかにも島の家らしく、玄関は無防備に開放かれて

いる。その奥に、座敷の一角が垣間見える。片隅に老人が座っている。白のランニングシャツに、真つ白の股引。煙草を口にくわえた真つ黒な横顔には、深い皺が幾重にも刻み込まれている。

「奴だ」

「案内人」が身を乗り出す。

「カメラ映りの良さそうな顔だな。名人のオーラがよく出てやがる。よし、あいつで行こう。あとは漁協に立ち寄って、この家の連絡先を聞いておくんだ。休みが開けたらすぐに電話して、あらためてアポを取るんだぞ。いいな」

しづぶ領きながら、大西はぼそつとつぶやく。

「今度はその老人の人生を道具にしてしまうのか」

いかにも力のない吐息が、後から後からこぼれ出てくる。蟬たちがかん高く鳴きはじめる。中学生の頃、担任教師が教えてくれた芭蕉の句が、心によみがえってくる。

やがて死ぬ けしきは見えぬ 蟬の声

朝食を終えてからは、まさに「案内人」の独壇場だった。

漁協に向き、鯛釣り名人の連絡先を手に入れると、彼と大西は俯瞰シヨットの撮影場所を探すべく、山の中腹に位置する八代神社まで歩いて上った。賽銭箱の頭上には、海の神として知られる綿津見命の絵が掛かっている。そこに書かれた「大漁満足」「海上安全」の文字をちらちら見やりつつ、長い参道の階段にどっかとお腰を下ろす。白くきらめく大海原が前方に大きく広がっている。風が風いているせいとか、陽の光が容赦なく肌に突き刺さってくる。しかしその一方で、また体が重く感じられてくる。膝に力を入れて何とか立ち上がる。そして、「案内人」

に急かされるがまま、神社の境内を見てまわることにする。

社の隣に、直径三メートルほどの大きな輪が置かれている。日陰で涼む老人にすかさず「案内人」が尋ねると、それは島の言葉で「アワ」と呼ばれるものらしかった。

「毎年の暮れになあ、島の若い衆が総出で浜グミの枝をまるめて作るんよ。日輪の形をまねてな。大晦日になると、『宮持ち』の家にみんな集まって煙草作りをするんや」

そう言っ煙草をのんびりふかすと、老人は「ゲータ祭り」の話をしはじめた。この島ならではの年中行事の一つである。

毎年正月の夜、白装束に身を固めた島中の若者たちが、大歓声を挙げながら「アワ」を竹竿で高く空へと突き上げるのだという。そのまま上空で輪をもみ合いながら、波打ち際を一時間近く練り歩くのだという。祭りが終わると、「アワ」はこうして本殿の境内に立てかけられるのである。

冬の荒波を前にして、狂喜乱舞する白き物の怪たちの姿が、大西の頭の中をふいにかすめる。「日輪は二つも要らぬ」「偽りの輪は叩き落とせ」とばかりに、夜の闇を跋扈する男たちの影。合戦場の槍のごとく激しく交錯する、長い竹竿たち。

どこか遠くへ連れ去られるような思いに浸りながら、大西は再び輪をじつと眺めようとした。だが、「案内人」がまたしてもそれを許さな

い。

「宮持ち」って何ですか

祭りの当番役のことを、ここでは「宮持ち」と呼ぶらしい。毎年、各家が持ち回る仕組みになっているのだという。それを確認するや、「案内人」は間髪入れず、次の質問を口にした。

「今年の『宮持ち』の家はどこですかね」

当惑した顔つきで老人がその場所を口にする、と、「案内人」はすくさま大西を引つ張って、その家突き止めに向かったのである。

路地から覗くと、「宮持ち」一家の団らんは窓越しに手に取るよううかがえた。

「よし、この家族も撮影しておこう。さっきの老人の話によると、『宮持ち』は今も毎朝、夜明け前に海辺まで降りていき、海水を丁寧に汲みあげて、お清めと称して辺りにふりかけてまわってるそうじゃないか。この伝統行事を、この島では『潮花（しおばな）ふり』と呼んでいるらしい。これも撮影しておけば、番組に伝統の息吹がプラスできる。今も廃れぬ良き伝統、つていうやつさ。視聴者の中には、この手の話が好きな奴がけっこういるからな」

「案内人」の嬉々とした饒舌を、大西はただぼんやりと聞いている。

「こんな旅がしくて来たわけじゃないのに」

まる一日かけて、全ての路地を見てまわる。宿に戻ったのは日暮れ時である。少しばかり悪寒がする。夕食を半分残す。早々に布団を敷いてもらう。床に着くやいなや、あつという間に深い眠りへと落ちていく。

ふと目覚めると、旅館はひっそり静まり返っている。室内は完全な闇の中である。一瞬、自分が目覚めているのか、まだ眠っているのか、判断がつかなくなる。

朦朧としつつ、昔読んだナサニエル・ホーソンの作品を漠然と思いつく。たしか、「The Haunted Mind」というタイトルだった。「憑かれた心」。夢の中で覚醒しているかのような、覚醒しながら夢を見ているかのような、とても不可思議な時間を描いた、散文詩のような文章である。

あの作品の世界のごとく、一つ一つの感情が、それぞれ勝手に人格を得て、自分の中を飛び回りはじめる。「悲しみ」が、「望み」が、「絶望」が、「宿命」が、「恥辱」が、そして「呵責」が、自分と同じ顔をまわって、次々と目前に現れる。プリューゲルの絵さながらに、有象無象のグロテスクな人間たちが、心の画面を埋め尽くしていく。「案内人」によって抑えつけられていた様々な自分が、ここぞとばかりに奔放に振る舞

いはじめる。微熱のせいだろうか。そうだ、そうに違いない。それなのに、なぜかどこかへ行きたくて仕方がない。心が妙にじれている。

おもむろに起きあがり、静かに服を着る。物音を立てないようにして部屋を出る。そのまま闇の中を手探りで進み、階段を静かに降り、自分の靴を探して履き、そろりそろりと玄関を開ける。頭上は満天の星空である。腕時計を月光に照らし、夜中の三時であることを確認すると、月明かりだけを頼りに、路地の斜面をじわじわ上りはじめる。無性に、あの「観的哨」が見たくなつたからである。

無人と化したかのような集落が、足元から扇形に広がっていく。「案内人」もどうやら、どこかへ消えてしまったようである。あるのはもはや、自分と闇と月だけである。額に汗がじわつとにじむ。ひたすら憑かれたように歩き続ける。微熱など、とうに忘れてしまっている。

目の前に人影が現れる。ぎよつとして立ち止まる。向こうも驚いたように足を止める。こちらがまた歩むと、向こうも慎重に歩き出す。幽霊のようなつかみどころのない存在感が、少しずつこちらへと近づいてくる。お互い息を飲みながら、闇の中をふつとすれ違う。相手は、竹でできた柄杓のようなものを握りしめている。「宮持ち」だ、と直感する。今から港へ降りていき、海水を柄杓にたっぷり汲んで、あの「潮花」とやらをふるのだろう。禊ぎの場へと去っていく彼の背中を、黙ったまま眼で追う。まるで、勝手に独り歩きするわが分身のように思えてくる。

「案内人」はどこで何をしているのだろうか。いまだに一言も話しかけてこない。どこかで眠り込んでいるのだろうか。

道の分岐点によろやくたどり着く。右へ行けば「観的哨」、左へ行けば灯台である。灯台の光が、まぶたの裏にふつと浮かぶ。その幻をあえて振り払い、右の闇へと足を向ける。

怪しく屹立する木立の影、また影。後方に燈明山の存在を感じつつ、

なおも歩を進める。今度は中島敦の「山月記」のことが思い出されてくる。自らの詩才を一流と信じ込むがあまり、官吏の道をあえて捨て、詩人になろうと決意する一人の男。不幸にも、その才能は開花せず、彼の自尊心は大きく傷つけられる。俗界から行方をくらませた男は、ある日のこと、闇の中から呼ぶ声に応じ、山中へと分け入る。そして、虎へと変身してしまうのである。彼の心は、次第に野生に支配されていく。人間としての理性は、どんどん失われていく。詩に取り憑かれるがあまり、虎となってしまう人間。その雄叫びが、この闇からも聞こえてきそうなきがしてくる。

歩き出してから三十分は経つたはずである。ようやく島の反対側に着く。雑木林のただ中に、「観的硝」の建物が見えてくる。今ではただの廢墟でしかない建物である。

風が軽く頬を叩く。朝焼けまでには、まだ時間がありそうである。月光を浴びながら「観的硝」の屋上にうずくまり、真つ暗な海面を見渡してみる。闇と自分が一つになったような錯覚が、睡魔のように、酔いのように、めまいのように心を襲う。

いろいろなイメージが、眼の前を無秩序に乱れ飛ぶ。蛸壺の中の暗黒。月夜の海辺を跳梁する白装束の男たち。無数の竹竿に突き上げられる日輪。夜の山中を独り歩む神の使い。人間と絶縁し、孤独に吠える虎。死を忘れて狂い鳴く蟬たち。

眠る「案内人」を無視するかのようには、いろんな人間たちが周りを取り囲みはじめた。「わしはあんたの道具か」——こつちをじろりとにらむ鯛釣りの漁師。「撮影もついに終わってしまった。これでこの島も用済みか」——哀しげに微笑む三浦友和と山口百恵。「どうして世間は、俺たちの作る物語にこうも飢えているのか」——苦笑する放送局の上司たち。「ふだ」を持ったまま、テレビにかじりついている人々。みんなどうやら、何かを買いあさることに飢えているらしく、チョークで「ふ

だ」に数字を書き込んで、画面に向かって何かをひたすら叫んでいる。そして、その上を悠々と舞い続けているのは、鳶たちの群れである。

この混乱を、丸ごとそっくり受け入れてみようではないか。大きな器にでもなったつもりで。きれいな一本の線ではなく、ひたすらだっ広い一個の器になってみるのだ。

もしかすると自分は、男でも女でもあり、日本人でも非日本人でもあり、現代人でも古代人でもあり、人間でも獣でも植物でもあり、悲劇の人でも喜劇の人でもあり、傍観者でも当事者でもあり、白でも黒でもあり、陽でも陰でもある存在ではなかったか。

全ての相反するものをごちゃ混ぜにしたもの。一つの名前では呼び表せないもの。それが自分であり、人間ではないのか。

説明しづらい浮遊感が、ゆらゆらと体をもてあそぶ。

闇の向こうから、その意識がどろろと滲み出てくる。

かすかに朝焼けを感じ、眼を少しずつ開ける。

薄まっていく闇の中に、裸体の女が見えてくる。

いつの間にか、自分も裸体になっている。

「その火を飛び越してこい、その火を飛び越してきたら」

意を決し、朱色に燃えはじめた太陽の上をがばつと飛ぶ。

ああ、流々だ。やっぱり流々だ。

眼も、鼻も、口も、耳も、頬も、髪も、首も、手足も、胸も、腹も、香りも、肌の感触も、全てが、全てがここにそろっている。

抱きしめてみる。唇を重ねてみる。舌がない。心から嬉しくなる。

もはや何の障害物もありはしない。このままつながってみる。流々が叫ぶ。

まだあるの あるはずなの まだ嘆けるはずなの まだあるの あるはずなの いっぱい いっぱいあるはずなの みんな鳴り響いてる ああ鳴ってる まだ響いてる だからくっついて もっともっと もっとつながって ああみんなくっつく みんながくっついてくる もっともっとくっついて みんな わたしとくっついて みんながわたししながら わたし ああ流れてく みんな流れてく 置いてかないで わたしも流して さあ早く流して お願い 流して わたしもいくから すぐにいくから

どうして 俺とこうなろうと思ったんだ

やけどを負う前の彼の顔に 瓜二つだったからよ

じゃあ あなたはどうしてこうなろうと思ったの

別れた妻の顔に 瓜二つだったからだ

このまま二人そろって落ちていきましよう

落ちるって 一体どこへ

あそこであの子が待ってるから さあ 早く

あの子って いったい誰の子供だ

さあ 早く一緒に さあ 見つめて 見つめてほしいの 見つめてもっと見つめて

No.9 No.9 No.9

嘘だ。これはきつと夢だ。

私の人生はこんなものではなかったはずだ。

これはきつと他人の人生だ。

きつと誰かがどこかで、私の人生を勝手に書き換えているんだ。

本当に飛び越えたかどうか不明のまま、色濃くなっていく朝焼けを独り眺める。そのまましばらく眠った気がする。首筋に太陽の熱を感じて眼を覚ます。よろよろと立ち上がる。「観的哨」の隅っこに、白い花が小さく咲いている。微風に揺れるその花弁は、嬉しくも哀しげで、はかなくも頼もしげである。「潮花」という言葉を、心の中でもう一度かみしめてみる。はるか彼方に、伊良子岬の突端がうつすらと見えている。しかし、それもまもなく消えていく。花も消える。島も消える。海も消える。森も消える。全てが霧のごとく消えていく。

そして——「案内人」だけが隣で冷笑している。

「おい、少しは金のことも考えろよ。誰のお陰で、今まで給料をもらえてこれたと思ってるんだ。何から何まで、放送局のお陰じゃないか。テレビあつてのおまえなんだぞ。テレビがおまえを育ててきたんだぞ。」

テレビこそおまえの親なんだぞ。おまえたち世代はこれだから困る。感謝の念を知らない無礼な連中の集合体、それがおまえたちなんだ」

その声に、大西は何度も何度もうなずいていた。仕事を通じて磨き上げてきた演技としてのうなずきなのか、それとも、心の底からの嘘偽りなきうなずきなのか、もはや彼には判別不可能であった。

ようやく図書館を出る。もう夜だというのに、外はなおも蝉時雨である。

ずっと長いこと、夢の中を歩いてきた気がする。

かばんの中身をもう一度点検してみる。未完の詩も、眠り薬の小瓶も、ちゃんと元のままである。小瓶を取り出し、最後の一錠を飲み込む。このままだと、明日からは葉なしの生活である。早くコスモに会わねばな

らない。家に帰ったら、すぐにまたメールを打たねばなるまい。

星一つない東京の夜空を見上げてみる。あの黒ずくめの姿が、またはつきりと思い出されてくる。この夜空の向こうに、コスモは必ずいる。か細かったあの指。あの指が、今にもここまで伸びてきそうな気がする。

指は私の体をいとも簡単に弾くだろう。私はただのモビルである。押し方一つで動きが何千万通りにも変わる、あの「カオスマン」である。私は揺れる。揺れ続ける。

心なしか、コスモの声が聞こえてくるかのようである。

「毎回毎回、違う動きをしているんです。だから好きなんです」

まだ夢の中なのかもしれない。別にそれでもかまわない。今度こそちゃんと流々に会おう。あともう少しだ。あともう一歩なんだ。

『あともう一步で』について——作者へのインタビュー

(聞き手は匿名を希望・彼のインシヤルはG・Tである)

G T 小説、たいへん興味深く拝読しました。この小説を書くにあたって、基本的にどんな心構えでいらっしやったのか、まずはその辺を教えてください。

高野吾朗(以下g t) 小説のようできてどこか詩であり、詩のよう

いてやはり小説、といった奇妙な構造にすることを当初から考えていました。ねらうは「私小説」ならぬ「詩小説」、と心に決めていました。

G T 神戸の震災、原爆、そして乱交グループと、いろいろな問題が出てきましたが。

g t 普通に考えると「ほとんど関係なさそうな」複数の出来事が、「えもいわれぬ」不可思議な形でなぜかつながってしまう——そんな書き方をあえてしてみたかったです。まるで昔の絵巻物のごとく、一枚の「キヤンバス」に向かつて全ての事物を(一見、脈絡なさげに)惜しげもなくばらまき、それらの間に神秘的な関わりが潜んでいることを、読者に向かつて一つ一つ暗示していこう、そう思ったのです。いわば「俳句的な思考」なるものを、いつも心がけるようにしていました。「論理の飛躍」的な関係性をわざわざ生み出すよう、常に心がけていた、とでもいいまいしょうか。

G T ただそのおかげで、各場面の印象がひどく弱いものになってしまった、ということはないでしょうか。各設定が「単なる設定」にのみ終わってしまっており、そのおかげで、主人公やコスモや流々になかなか共感しにくくなってしまっている——そんな気も若干するのです

g t 各場面に印象を強く持てなかったことを、あたかも「作品のせい」にしてらっしやる様子ですが、それはすなわち、「自身の読み方自体に

は「全く問題がなかった」——とおっしやりたいわけでしょうか。印象が「強い」とか「弱い」とかいう尺度を、わたしはさほど重要視していませんでした。「この作品、印象が弱いな」と一蹴だけで読み終えてしまうような読者は、そのままさっさと去ってもらって結構です。登場人物に対しては、共感なんか安易にしてほしくはありませんでしたから、「共感しにくかった」という批判は、どちらかというところ「ほめ言葉」のように聞こえますね。

G T なるほど——かなりの自信でいらっしやるようですが、しかしやはり、まだまだその情熱に「表現自体が追いついていない」といった感じは、あちこちに色濃く残ってしまっているのではないのでしょうか。もつと推敲し、もつと文体を磨き、さらに輪郭を明確にしながら、あらためて世に問うことにした方が余程よかったですのではないですか。

g t そういう意見を聞くと、半分納得しつつも、半分「簡単に屈してはならない」と感じます。たしかにまだまだ脇の甘いところ、やりすぎたところ、若書きのところもあったでしょう。しかし、それらを巧妙に削ぎとって「洗練された」作品に仕立てあげ、下手にこの作品を「大化け」させてしまうことは、せつかくの創作の原動力をも削ぐことになってしまい、挙句の果てには、「テクニクの巧妙さアップの代わりに、もつと大事なものをみすみす失ってしまっただ」というような悲しい結果にさえなりかねないような気がしてならないのです。この小説の今の形が、当初の信念をもつとも満たしてくれているように思えてならないので、今のところはこの形を、修正・改稿する気には全くなれないのです。この作品中の表現の甘さを批判する声に対しては、この作品自体を手直しすることによって返答していくのではなく、むしろ、いま細々と書いている次作の方に生かすことによって、こつこつと返答していくことにしたい、そう思っています。とはいえ、何十年か経ったら、この『あともう一步で』を大幅に修正したくなる日がもしかすると本当に来るのかもしれないけどね。

GT 「創作の原動力」とおっしゃっていましたが、それはこのインタヴューの冒頭でおっしゃっていた「詩小説」志向のことを指していらっしやるのですか。

gt いいえ、それだけではありません。「洗練された表現」で他者を描くことに対する「抵抗感」を、決して忘れないようにしよう——そんな風にも強く思っていました。巧みに洗練された成功作を書くくらいなら、ひどく奇妙だけれども何かとんでもないを抱え込んでいるような「大失敗作」を書くのだ——そう考えてもいました。絶対に「万人に理解されよう」などとは思ってはならない——毀誉褒貶が相半ばするような作品にしなければならぬのだ——なぜだかはわかりませんが、こうした思いにさえ取りつかれていたのです。これらをまとめて、仮にここでは「創作の原動力」と呼んでみたわけです。

GT ということは、作品中に時おり見受けられた独特の冗長さも、いわば意図的だったというわけですか。とりわけ、途中の短歌の乱立や最後の長大な散文詩などは、かなり読むのがしんどそうな障害物としか思えなかつたのですが。

gt あえて読む者の眠気を誘うように書きたかつたのです。「読んでいて眠くなる物語」というフレーズは、「大失敗作」を表す際によく使われるようですが、それが逆にこの物語ならではの独特の世界観となるよう、あえて意図的にそう書いてみようとしたのです。「読んでいて眠くなる」物語を書くことを、安易にタブー視してはならない——催眠効果の高い（一種、お経のごとき）物語を書くつもりで書くのだ——そう急いで書いた結果があつた作品、というわけです。おかげで時には、過剰な「反復」や過剰な「説明」や過剰な「逸脱」を（半ば意図的に）導入せざるを得なくなりました。しかし、たとえそれが一部の読者から「冗長」「書き込みすぎ」「印象薄」「読みにくい」と非難されることになつたとしても、それを今のうちから恐れるようなことがあつてはならない——脱稿後に受けるかもしれぬ批判を、今のうちから恐れてはならない

——脱稿後に受けるかもしれぬ罵倒を、今のうちから案じてはならない——ずっとそう考えながら書き進めていたわけです。

GT いまお聞きした高野さんの「意図」ですが、なかなか一般の読者には通じないように思うのですが。

gt あなたが言う「一般の読者」って、いったいどんな読者ですか。あなたが勝手に考えているだけの偏った「読者像」なのかもしれませんよ。わたしの作品を批評なさるのなら、それと同時に、自分の読み方それ自体も自己批判なさつたらいいがですか。

GT はいはい、わかりました。それでは、と——最後に、「批評性」という問題についてお聞きしたいと思えます。このメタフィクション的な作品の中には、「小説ならではの批評性」の他に、「批評という形式ならではの批評性」が混入してしまっているように思えてなりません。た。「小説ならではの批評性」が立ち上がろうとするやいなや、「批評ならではの批評性」がいきなり横から現れてきて、せつかくの「小説ならではの批評性」を残念にも破壊してしまう——そんな感じがとても強くして、ひどく違和感を覚えたりもしたわけです。もしかすると、もつと違う手法をお取りになつた方がよかつたのではないか——とも思つたりしたわけですが、その辺のところはどうお考えですか。

gt 「小説の批評性」と「批評の批評性」を区別することに、私はさほど興味を感じていません。それらを明確に区別しようとする姿勢には、逆にひどく窮屈さを感じます。その二つはちゃんと区別しておいてくれないと困るのだ、とおっしゃる読者は、どうやらこの小説とはかなり相性が悪いようですね。ただし、こうした方々の嗜好にわざわざ合わせるべく、この作品をさらに改稿しようなどとは、つゆも思っておりません。読者がこの作品を選ぶのではないのだ、この作品の方が読者を逆を選ぶのだ——不遜な言い方をしているのは百も承知ですが、そういう思いは今も強烈にあります。ですから、「違う手法」を考える気になど全くないのです。ところで、その「違う手法」って、例えばどんな手法で

すか。この場で具体的におっしゃってみてください。

G T いや、それについてはまた別の機会に、ということ。それでは、今日はどうもありがとうございました。

(聞き手G Tの後日談) あんなに厚顔無恥なナルシストだとは、全く思っていませんでした。小説家としての才能が本当にあるのかどうか、かなり疑わしく見えましたし、他人からの建設的批判に対するあのひ

どく意固地な対応ぶりにも、ただただあきれるばかりでした。あんな書き手には、もう二度とインタヴューしたくありません。今の自己閉鎖性をもっと捨てるよう努力し、「あまねく世の中のために有用なものをもっともっと書いていくのだ」といったような気概をさらに持つようになさった方が、ご自身のためにも断然よいと思います)